始
2 3 4 5 6 7 8 9 1m 90 1 2 3 4

ニイチエ著
三井信衛譯

この人を見よ

全

東京 太陽堂 發行

大正
13. 10. 16
内交

125-234

緒言

「この人を見よ」Ecce Homo はニイチェ最終の作品であつて、言ひ得べくばその只一つの自舒傳である。一八八八年の十月、四十四歳のニイチェはこの書物に初めて筆を染め、その年の十二月全くそれは完成したが、しかも間もなく狂人としての生活を迎へたのであつた。さうしてそれから十二年後の一九〇〇年八月二十五日、病床をその妹に守られつゝこの世を去つた。

ニイチェの思想に關しては今更喋々するまでもない。彼の所謂「沒落道」と「超人」との思想は、さまざまの形となつて世界文化の上にその影響を殘した。近代文明の「憂鬱」の上に極めて强氣的な英雄的な、さうして大膽な明るみを眞向から投げ與へたのは彼であつた。

ニイチェにとつては既成宗教と所謂理想主義とは、基督でさへもシュライエルマッヘルでさへもショウペンハウエルでさへもヘエゲルでさへもカントでさへも、否全能の神でさへも只人間に向つて「頽廢」と「衰亡」とを與へる機關(トラ)の外の何物でもなかつた。しかも彼の神に對する挑戰は、基督敎に對する挑戰は、哲學者に對する挑戰は、婦人運動に對する挑戰は、否全ての大衆に向つての挑戰は、顯然たる超人哲學として「この人を見よ」に表明された。さうしてその最後に彼は叫ぶのである。Ecrasez l'infâme (雪辱せよ)と。

一個の自舒傳として見るならば「この人を見よ」ほど奇異なものはあるまい。その過去の出來事をば次から次へと逐一物語ることは彼の性格が許さなかつた。彼は自らを物語るに及んで、その言葉に從へば彼自らの「臟腑」を物語つた。彼自らの「宿命」を物語つた。まことに彼は「宿命」それ自身であつた。

譯書については只譯者の語學力の不足のために、原作の俤をば十分に傳へることの出來なかつたのを殘念に思ふ。

因みにこの飜譯は獨逸原本を根底として、處々 "Ecce Homo and Poetry," translated by A. M. Ludovici を參照としたものである。和譯本としては安倍能成氏の「この人を見よ」(一九一三年、南北社發行)及び生田長江氏の「ツアラトウストラ」から敎へられたところが多く、こゝに兩氏に對して衷心から感謝の意を表したいと思ふ。

終りに臨みこの飜譯に對して深甚の助力を與へてくれた畏友松平道夫君と、この譯書の出版を快諾せられた照井健伍氏とに向つて千の感謝を表したい。

一九二四年四月二十五日

譯者

この人を見よ

目次

序説……一
何故私は賢明であるか……一三
何故私には知慮があるか……四五
何故私は良書を書いたか……八七
悲劇の發生……一一一
非時代思想……一三五
人間的な、餘りに人間的な……一三七
黎明……一五三
喜ばしき知識……一六一
ツアラツストラ如是說……一六七
善惡の彼岸……一九九
道德體系……二〇五
偶像の黃昏……二一一
ワアクナア記……二二七
何故私は宿命であるか……二三三

序

說

ECCE HOMO

Wie man Wird Was man ist

一

私がこれまでに與へられた要求の中で、一番大切なそれを提げて、人類に向はなければならないといふことを前以て考へるならば、私が如何なる人間であるかを述べるといふことは、私にとつては必要以上のことだとも思はれるのである。だが實際を言へば、人々は私が如何なる人間であるかを既に知つてゐる筈である。何故といふに、私はこれまで自分自身といふものをば明かにしないで過したことはなかつたからである。然しながら、私がさうした大切な任務を持つてゐるにも拘らず、世の人々が甚だ小つぽけだといふ証據には、彼等は依つて以て私に耳を傾けようとしないばかりか、私に目を向けようとさへもしないのである。私は私自身の創り出した信頼によつて生きてゐる。私が世に存在してゐるといふことは、恐らくは單なる偏見に過ぎないかも知れない。私が世に存在してゐないといふことを知らうと思へば、夏になつてオウバアエンガアヂンにやつて來る「學者たち」の中の

誰か一人と話して見ればわかるだらう……。かうしたわけだからこゝに於て、先づ私に耳を傾けよ、私はかういふ人間なのだ、他の人間と私といふものとを決して同列には置いてくれるな、とさう述べる必要が起つて來る。實は私の習癖、私の本能的な誇りは、かういふ必要の起るといふことには反對ではあるが。

二

一例を以て言ふと、私は決して怪異な物ではない、道德の異形ではない。——私は所謂道德家として崇拜された種類の人間とはまるで違つた性質のものである。實を言へば、かういふ事實こそは、密かに私自身の誇りとするところなのだ。私は哲學者デイオニソスの弟子。私は聖人にならうよりは、寧ろ一つの半獸人であることを望みたい。だがそれは兎も角、先づこの書物をば一讀してほしいのである。

私は多分、今言つたこの比較をば、心から明らかに書き現すことに成功したであらうし、

また多分、この一事以外にこの書物の意義は存在しないであらう。人類を改善するといふことは、私の決して關しないところなのだ。私の建設しようとするのは、新しい偶像ではないのである。古い偶像からは、粘土の足がどんなものだといふことを學びさへすればいゝ。（偶像とは私にとつては「理想」といふ意味の言葉であるが）を破壞する——これは既に已に私のなすべきものゝ一つであつた。現實といふものは、理想の世界が架空されゝばされるだけ、その價値と意義とは擦り減つて行く。「現實の世界」と「架空の世界」といふことは、獨逸の言葉では本當の世界と嘘僞の世界といふ意味である。……理想の齎した嘘は、現實に對する反抗であつた。人々自身はそのために、深い本能的な嘘つきとなり嘘僞それ自身となつた。さうして人々は、繁榮や未來や、未來に對する偉大な權利の保證を受けるものとは、まるで別種類の價値さへも求められるやうになつた。

三

私の著作の雰圍氣を呼吸することを知るものは、その零圍氣が高山のそれであつて、さうして又力あるそれであることを知るであらう。人間はこの零圍氣に適するやうに造られる必要があるのだ。でないならば、その反對側に冷却してしまふといふ危險が、まことに大きいのである。冷氣は近く孤獨は恐ろしい。——さうしてそこではあらゆる物々が、明るい光線のそのうちで、どんなに安らかに眠つてゐることか。人々はどんなに自由に呼吸することか。人々はどんなにたくさんのものが、彼の眼望の中にあることを感ずることか——自分から身を挺して高山と冷氣とに入るといふことが、私のこれまでに理解し體驗して來たところの哲學である——生活の中にあつて、親しみ薄い疑ひ深い人たち、即ち道德といふものによつて追放された一切のものに對する探求である。私はさうして、未踏の地をば徘徊しては得たところの體驗によつて、曾ては道德化とか理想化とかの根底となつたいろいろな動機に向つて、世にあるものとはまるで異つた觀察をば下すことを會得した。こゝに於てか私は、哲學者たちの現れざる過程、即ち哲學者たちの壯大な名の下に存する心域は、私にとつては甚だ明かとなつた。例へばこゝに一つの精神があるとすれば、それはどれほどの眞理を包含することが出來るか、或は又どれほどその眞理を實踐することが出來るか。これは價値といふものをば判斷する基本として、私には益々必要なこととなつた。理想を信仰するといふ一個の迷ひは、決して盲目的ではなくて卑怯なのである。どんな實行でも、またどんな知識的な發足でも、全ては勇氣によつて、自らに向つての强さから、さうして又自らに向つての純潔さからのみ成し得るものである。私は理想に對して反對するものではなくして、啻に警戒するものなのである。而も今までその根本から禁じられてゐたものは、常に只一つ眞實のみであつたが故に、私は『我等禁じられたる者を渴き求む』といふ旗印を手にして、私の哲學はやがて勝利を得るであらう。

四

——私の著作の中で「ツアラツストラ」は獨自の地歩を占めてゐる。私はこの著書で、

曾て人類になされた最大の貢献をしたのである。何千年かに渉つて物語るこの著書は、現世にあつての最も高い位置の書物であるばかりではなく、まことに高山の空氣の書物である。――人々のあらゆる事象は、遙に無限の彼方にある――又それは最も深淵の書物であり、奥深い豐富な眞理から生れ出た書物であり、さうして又釣瓶が下されて上つて來る時、黄金寶物で充されなかつたことてもない、永しへの泉である。しかも道德家と呼ばれるこころのあの病的なものこ、さうして「偉くならうこする意志」によつて生れた奇怪な雜物とは、そこに言葉を發することはない。若しも人たちが、知識こいふ意味に向つて哀れなる誤解をしまいこするならば、何をおいてもこの私の口から語られるこの言葉、この公明正大な言葉をば、正しく聽く必要がある。「嵐は靜かな言葉から吹き來る。鴿の脚が携へ來る思想こそは世界を導く――」

無花果は樹から落ちる。美しくしかも美味。落ちる時その赤い皮は破れる。私

は色づいた無花果に吹く北風である。
わが友よ、敎は無花果のやうに諸君に落ちる。
今その汁を飲み、その果を口にし給へ、邊りは秋。うらゝかな空。しかも白日――

こゝに物語るものは狂信者ではない。こゝに說かれるものは「說法」ではない。こゝに求められるものは信仰ではない。言葉は續いて一つ一つ、量り知られぬ光明の盈溢と幸福の寶居とから滴り落ちて來るのだ。――この言葉の調子は、優しくそして長閑である。只ひこりそれは惠まれた者にのみ得ることが出來る。その聽者であることは、まことに譬へ方ない特權でなければならない。どんな人たちも、自由にツアラツストラを聽く耳を持つことは出來ない。……それにも拘らずツアラツストラは一つの誘惑者ではないのであらうか。……しかしながら初めて彼がかつての孤獨に歸る時、彼自らはどんなに物語つたであらうか。それは世のあらゆる「賢人」や「聖人」や「救世者」や、或はそのほかのデカタンたちの、

さうした場合に語ることゝは凡そ正反對なそれである。語るところが正反對であるばかりではなく、また人間もものまでが別物なものである。

わが弟子たちよ、私は今只ひとり行くといふのだ。君たちもまた只ひとり行き給へ。私はそれを欲する。

心から私は君たちに勸める、私から去り給へと。さうしてツアラツストラに自らを護り給へ。しかも彼を恥づるのは更にいゝことだ。恐らく彼は君たちを欺いたであらう。

知識ある人たちは只にその敵を愛するばかりではなく、またその友をも憎み得なければならない。

只に弟子としてあるのは、その師に向つて心から報ゆることにはならない。どうして君たちは、私の冠を奪はうとはしないのか。

君たちは私を尊敬する。しかもその尊敬の空しく消えた瞬には、どうしようと言ふのだ。心せよ君たち、彫像の君たちを殺さないやうに。

君たちはツアラツストラを信ずるといふのか。だがツアラツストラに何があるといふのだ。君たちは私の信仰者である。だが全ての信仰者に何があるといふのだ。

君たちは君たちを索めずしてしかも早くも私をば見出した。すべて信仰者のすることはそんなものだ。すべての信仰の價値薄いのはこゝにあるのだ。

私は今君たちが私を棄てゝ、君たち自身を見出すことを命じる。さうして君たちが全て私を否む時、私は初めて君たちに向つて歸つて來るであらう。……

フリイドツヒ・ニイチエ

萬物は全て熟して葡萄が褐色となるばかりか、私の生命の上にも光は落ちて欠くるとこ

ろもない今日、私は過去を省み未來を仰ぎ見た。私は一ときにこのやうにたくさんの、そしてこのやうに善い事象を見たことはない。今や私は私の第四十四年を無意味には葬らなかつた。私はそれを葬つても差支へはなかつたのだ——この年の生命であつた者は救はれた。亡びざる者である。「一切價値轉換」の第一章や、「ツアラツストラの歌」や「偶像の黄昏」やさては又鐵槌を奮つて哲理を探究しようとする意企——この年の全ての貢献、更にこの最終の四ヶ月の貢献さへも。どうして私は私の全生涯に感謝しないでは居られようか——さうして私は私自身に向つて、私の生活をば物語るのである。

何故私は賢明であるか

一

私の幸福な生活と獨特の性格とは、恐らくは宿命であらう。だが謎のやうな言ひ方をするならば、私は私の父のやうに死に、そして私の母のやうに生き、年を重ねて行くのだらう。言はば人生といふ一つの階梯の一番上と一番下とから來るところの、末世的であると同時に原始的なこの二重の血筋――若しも私のうちに、私の特異な點であるところの、人生全てに對する不偏性と黨派からの脱却とを形づくる何かがあるとすれば、恐らくはそれであらう。私は生命の盛衰徴候を知ることにかけては、他のどんな人たちよりも鋭い。この點で私は殊に勝れた師である――私はその二つをよく知つてゐる、私はその二つそれ自身である。――私の父は三十五歳で死んだ。父は優しくて慈愛深く、しかも病弱で、まるでほんの瞬く間の命を運命づけられた人間のやうであつた――生命それ自身よりも、優しい生命の思ひ出であつた。彼の生命の衰へかゝつたその年に、私の生命も亦衰へかゝつた。

三十六歳になると、私の生活力は最低の位置に下つた――私はそれでも尙生きたのだ。全く目の前の三歩でさへも見ることが出來ないで暮した。その折――丁度一八七九年――私はバアゼルでの教授の職を辭して、その一夏をば影のやうにサンクト・モオリツツで送り、しかもそれからは、私の生涯を通して一番光に乏しかつたその次の冬をば、またまるで影のやうにナウムブルヒで暮したのであつた。これは私の一番衰へた時である。「さまよへる者とその影」「Der Wanderer und sein Schatten はその間に書かれた。疑ひもなくその當時の私は、影といふものをば知つたのである。……初めて私の送つたゲヌアの冬のその次の冬には、血液と肉とが極端に欠乏して、しかもそれから誘因される甘味に富んだ精神的な氣持が「黎明」Morgenröthe を作り上げた。この書物に表れてゐるこの上ない玲瓏と快活や、さては精神的の盈溢さへ、私にとつては一番激しい肉體的の弱さと反かないばかりか、過度な苦痛の感じとさへも兩立するのである。三日の間苦しい嘔氣を覺えて、頭痛の休む暇とてもないその悶えの中で――私の頭はまことに論理的で明快だつた。さうして

健康な時にはそれを考へるにさへも、それに足るほど鋭敏でも冷淡でもないやうな、到底及びもつかないほどの事柄をも、非常に冷靜に考へた。恐らく讀者諸君は、例へば一番著しい場合、即ちソクラテスの場合に、私がどれほどの辯證法によつて、それをデカタンスの徴候であると見たかを知つてゐるであらう。熱に伴つて起る全ての病的の故障、とりわけ半昏睡狀態でさへも、今日に至るまで私は、少しも知る由もなかつた。それでその性質や回數は、學問によつて初めて知るより他には何の道もなかつた。私の血液は徐ろに流れて行く。私の熱をばはつきりと確めた者とてもない。長いこと私を神經病患者扱にしてゐる醫者はたうとうかう言つた。『いや、あなたの神經には少しも惡いところはないのです。私の方が神經質でしたよ』と。局部の衰弱などは到底指摘することは出來ない。全體の疲勞の結果胃組織の衰弱がどんなにか甚しくとも、生理的な胃病などには決してならない。一時まるで失明の危機に瀕した眼病なども、それは單にその他の結果であつて、その元來の原因から來たものではないのである。だから生活力が增して來る度毎に、視力も再び加は

つて來た。私にとつては快癒といふことは、非常に長い年月のことを言ふのである――だが哀しいことには、それはまた同時に、ある種のデカタンスが再發したり消滅したり、即ちその循環をば意味するのである。若し今まで述べたところを認むる時は、今更私がデカタンスのいろいろな問題を經驗したといふことを物語る必要があるだらうか。私はデカタンスといふものを、徹頭徹尾知つたのであつた。全ての緻密極る理解の手段や、或はニュウアンスといふものに對する感覺や、さては又「どこからどこまでをも見る」心理のやうなものや、それからその他の私に獨特なものは、この時に初めて學んだのであつた。私に持つてゐる全てのものは、全ゆる觀察機關や觀察そのものまでが鋭くなつたこの時代の特異な產物であつた。病弱者の側から健全な思想やその價値を見たり、或は又位置を變じて、豐かな生命の充滿や自負から、微細な働きを持つたダカタンスの本能力を見るといふことは――これは私の一番長い間の練習と私獨特の經驗であつて、私が若し何かの師となるとすると、これ以外には又とはあるまい。今も尙私はその方法を握つてゐる。私は遠近を轉換

する方法を會得してゐる。これは先づ「價値の轉換」といふことが、どうして私にだけは可能であるかといふ第一の素因なのである。

二

言ふまでもなくデカタンスであるといふことを除外するなら、私はそれとは正反對である。仰々デカタンスといふものは自分には不利な方法を選ぶ者なのであるが、私が不良の狀態に對して本然的に正しい方法を選んだといふことは、とりわけそれに對する一つの證憑である。つづまるところ私は總じて健康であつて、時に例外としてデカタンスだつたのである。絕對的な孤獨とか、その習慣性として行ふ健康者からの世話を受けたり、看病を得たり、さては又治療を授けられたりしまいといふ抑制――これはその時に際して一番必要なものは何であるかといふことについて、本能といふものが絕對に確實であることを現す

ものである　私は私自身を私の手に抱いた。私は私を再び健康に復した。かういふ風に健康になるがためには――それは全ゆる生理學者も認めるこころだらうが――その人がその根本から健康だといふことにある。典型的な病人は、健康にはなることが出來ない。自分から健康になることはより困難である。その反對に典型的な健康者には、病氣といふものは時に却つて生命の昂揚を誘ふこころの有力な刺戟ささへなり得るものである。私は今、あの長がつた病氣の頃が心からさう眺められるのだ。言はば私は私自身を身内に藏して、新しく生命を生長さした。他の人たちが直ぐには味ふことの出來ないやうな、さまざまの好いこゝや微かなこゝささへも知つた――私は健康を得ようとし、また生命を獲ようとする意志によつて、私の哲學をば創り出したのだ……。何故かと言ふと次のことに注意して貰ひたい。私が厭世家ではなくなつたのは、私の生活力の一番低まつた年頃のことであつた。自己回復の欲求は、私に向つて哀愁と詠歎この哲學を禁じたからである……。天賦の佳良といふことは、一體どんなところに認められるものであらうか。天賦の佳良な人間といふものは、私たちの感覺を喜ばすといふことや、或は又さうした人間が、強固であると共に美しいといふことの中に認められるものである。彼の味覺するものは利益のあるものばかりである。彼の快活と慾望とは、有用であるといふ域を脱すると停止する。彼は害惡に向つてその救助方法を見出す。惡い出來事に向つては、それを自身に利用することが出來るだけ利用する。苟も彼を殺さないものなら、それは彼をより強くするのである。彼はその見たり聽いたり經驗したりする全てのものから、彼の内容を本能的に蒐集する。彼は撰擇の根原である。彼は多くのものをば落伍させる。書物とか人間とか自然とかを問はず、彼はいつもそれ等をば仲間に入れる。彼は撰擇することに依り、認容することに依り、さうして信任することに依つて、尊敬の意を表すものである。深い思慮ささうして精神的な誇とで以て生長した柔かさによつて、彼は全ての刺戟に向つて徐々に反應するのである――接近して來る刺戟に對して、彼はそれを吟味する。決してそれを、いゝ加減のところで取り入れるといふやうなことはしない。彼は「不幸」も罪惡をも信じない。自分に對しては少しも

隙のあるところはない。彼は忘却の方法を心得てゐる――彼にとつては全ての物が最善とならないではゐられない程、強いのである。――そこで私はデカタンの反對である。何故なら、私が今まで說べたものは私自身のことに就て言つたのだからである。

三

かうした二重系統の經驗、即ち一見二つの世界に接觸することの出來る性質は、私の性格の至る處に繰り返されてゐるのである。私は二重に現れる人間である。私は第一の顏の他に第二の顏を持つてゐる。さうして恐らくは第三の顏さへも……。私には全て地方的にのみ國民的にのみ限定された見方を離れた見方が、私の血統の上からも許されてゐるのだ。私にとつては「善きヨオロッパ人」となることは容易なことである。一面私は、最後の反國家的獨逸人であるところの私は、現に獨逸帝國人民がさうであるやうな獨逸人であり得るよりも、恐らくはより以上の獨逸人であり得るであらう。私の先祖はポオランドの貴族であつた。私がさまざまな人種的本能や、甚だしくは自由中止權までをも、そこから承け繼いでゐるといふことを知つてゐるものはあるだらうか。途上に於て私が、いつも〳〵どんなにポオランド人からポオランド人として話をしかけられるか、ドイツ人と認められることがどんなに稀であるか、といふことを考へるならば、私は獨逸人としての要素をばほんの少ししか持つてゐない獨逸人であるに過ぎないと思ふ。だが私の母のフラツイスカ・エーラア Frazisska Oeler は、どんなに見ても純然たる獨逸人である。私の父系の祖母であるエルトムウテ・クラウゼ Erdmuthe Krause も矢張り同じである。後者は若年時代を舊地ワイマアに送つて、ゲエテの一家族とも交渉のないことはなかつた。その兄弟であるケエニヒスベルク神學校の教師クラウゼは、ヘルダが死んでからは總管理者としてワイマアへ呼ばれたのであつた。若いゲエテの日誌中に、私の曾祖母である彼女の母親が、ムウトゲン Muthgen といふ名前で出て來るといふことは、有り得ないことではないのだ。彼女はアインスブルヒの管理者であるニイチエと二度目に結婚した。ナポレオンが參謀本部と

共にアインスブルヒに入つた一八一三年の大戰役の年に、その十月十日彼女は子供を生んだ。彼女はサクスン人の婦人として、非常なナポレオン崇拜家であつた。同樣に私もさうであるかも知れない。私の父は一八一三年に生れて一八四九年に死んだ。リュツツエンから遠くないレツツエン教區の僧侶の職に入る以前、彼は二三年ばかりをアルテンブルク城で暮し、四人の王女たちを教へてゐた。その教へ子は、ハンノウフエル女王とコンスタンチン大公の夫人とオルデンブルクの大公夫人ださうしてアルテンデンの王女のテレエゼだであつた。その僧侶の職を授けられたプロシヤ王のフリイドリツヒ・ヴイルヘルム四世に向つて、彼は忠義の心に篤かつた。一八四八年の出來事（伯林の革命——譯者）は、彼を此の上なく哀しませたのであつた。私自身も王の誕生日である十月十五日に生れたが爲めに、私はホウヘンツオルレン家の名前であるフリイドリツヒ・ヴイルヘルムを與へられた。この日を撰んで生れたといふことは、何を措いても得なことだつた。私の誕生日は、私の少年時代を通じて常に祭日であつたのだ。こんな父を持つてゐるといふことを、私は一つの特權だと考へてゐたのであつた。私にとつては私の生活といふものが、それ自身一つの大きな肯定だといふことを除いては、この父を持つたといふことだけが一つの特權として認められていゝものである。わけても私には、柔く高踏的な世界に向つて到達するために、どんな手段も講じる必要はない。即ち只それをぢつと待ち盡すことが出來ればいゝ、と言つたやうなことがさうである。かうした世界に私は親しみ深い。私の內部の情熱は、こゝで初めて自由となる。この特權に拂ふべく私の全生涯を以てしたといふことは、決して高價な交換ではなかつた。——私の「ツアラツストラ」をば只ほんの一寸でも理解するがためには、恐らくは私と同じやうな事情の中になければならない——生活の方向に先づ第一歩を踏み出さなければならないのである。

四

私にとつては大きな價値が損はれるやうな時でも、私は自分で惡感を起すといふやうな

ここはなかつた――この一事も私は私の類ひなき父に向つて感謝を拂ふものである。そればかりではなく、どんなに非基督敎的に見えても、私は決して自らに向つて惡感を抱いたことはなかつた。私の生活を隅々までも解剖して見るがいゝ。私に向つて何人かが惡意を抱いたこいふやうな跡は、決して諸君は發見されないだらう――だが好意の方は非常に多いことだらう……。どんな人でも手古摺るやうな人間に向つての私の經驗の結果は、全てさうした人たちにこつては利する處の多いものである。私はどのやうな態でさへをも手なづけて見せる。私は道化者でさへも眞直にして見せる。私がバアゼルの高等學校で、その最上級にギリシヤ語を敎授してゐた七年間、私は懲罰を與へるこいふ機會をば遂に持つことは出來なかつた。怠け者の筆頭も私にこつては一個の勉强家となる。始終私は思ひもよらない出來事をば耐へて行つた。私は自分自身の主宰となるがためには、作意があつてはならない。どんな樂器であつてもいゝのである――「人間」こ稱する樂器の中で、能ふ限り調子はづれなものであつてもいゝ――私が若しもその樂器から、何かしら聽くに足るべきものを聽き出すことに成功しなかつたならば、恐らく私は調子が狂つてゐたに違ひない。しかもその樂器それ自らでさへ曾て聽いたこともないやうな音色を、私は幾度聽き得たかも知れないほどである……。私の耳にした中で恐らく一番の美しい聲は、極端な若い年で死んだあのハインリヒ・フォン・シュタイン Heinrich von Stein であつた。彼が苦しんで許可を得てから、エンガアヂンへ來るのではないと誰にも告げながらも、三日間シルス、マリアへその姿を現したのであつた。若いプロシヤの貴公子獨特の單純至極の性質であつて、ワアクナア主義の中にまで――更にヂュウリング主義の中にまで足を入れた優れたこの人は、この三日のうちに突然その人の到達すべき高い地に達する一つの翼を持つたやうに、まるで自在な嵐こなつて變化したやうであつた。それはこの高地のよい空氣のお蔭で、又何人こ雖も同樣である、徒らに人々かバイロイト市から六千呎の高地にゐるものではない、こいふことを度々私は彼に物語つた――けれども彼はそれを信じようこはしなかつたのである……。それはそれとして、私がさまざまな惡い行を受けたとしても、その根本を形づく

つてゐるものは「意志」であつて、假にも惡意ではない。それよりは――私がこれまでに示したやうに――私の生活の中に少くない害を與へたこころの好意に向つて、私は不平を言はなければならない 所謂全ての「沒我」の本能や、或は又他人の爲めに力を添へようとする「隣人愛」に對しては、私の經驗はそれに對して不信を持つべき權利を與へた。私に言はせれば、これ等は薄弱といふべきものである。全ての刺戟に向つて抵抗が出來なくなつた例證である。――同情といふものは只デカタンの中にあつてのみ道德と稱せられるものだ。同情ある徒輩に向つて私が非難する譯は、羞恥とか尊敬とか或は又距離に向つての微妙な感覺が、彼等には甚だ易々と失はれるからである。同情といふものからは粉々と俗臭が匂ひ、しかも殆んど不作法といふものに髣髴として似てゐるからである――或は又、大きな宿命や痛手を負ふた孤獨や、さては重罪を形づくる特權の中に、同情といふものが織り込まれる時、或る場合には全てのものを散々に破壞してしまふからである。同情の征服といふことを、私は高い道德の中に數へたい。私は苦悶の叫びが彼を訪れて、最後の罪のやうに同情が襲來して、彼自らそれを遠ざけようとする場合をば、「ツアラツストラの誘惑」によつて描き出した。何處までもその中心を成してゐるこころの、所謂沒我的行爲のうちに始終するさまざまの衝動の上に、その高い任務をば純潔に持ち耐へるといふことは、ツアラツストラのやうな人間の受ける試練、恐らくはその最後の試練である――その力量の本當の證表である……。

五

またその他の點でも、私は只私の父に過ぎないのである。さうして言ひ得るならば、余りにも早く亡くなつた父の生活への承繼である。些かな、或は又、非常に大きな愚劣が私に向つて仕向けられた時、同等の人々のうちに生活したことなく、又「同情」や「返報」の念に乏しい全ての人たちと同樣に、私は全ての對抗方法や全ての保護方法――防禦とかあらゆる辯明をも禁じた。私獨特の返報は、愚劣に向つて能ふ限り敏捷に聰明をば差し向けることにあ

る。だがさうすればする程、益々愚劣が追つかけて來るだらう。例へを持ち出すならば、酸つぱい經驗を逃れようとして、糖果の入つた罎をば差し向けるやうなものである……。私に向つて何でもいゝから少しばかりでも惡い行をして見るがいゝ。私がそれを「返報」することは確實だと思はなければならないだらう。直ちに私は「惡行者」に向つて感謝を表すのである。(場合によつてはその惡い行爲に向つてさへも)——また時としては何かを與へるよりも、もつと叮重な結果になる、卽ち彼に向つて何かを請ひ求める機會を見出すといふことになるのである……。そればかりか、極めて粗野な言葉や、極めて粗野な手紙でさへも、私の見方によると沈默よりも却つていゝもので、却つて叮重なものである。沈默の人たちは、いつも內心の纖細と優雅とを欠いてゐる。沈默といふことは反理である。物をぐい呑みにすると、そこには定つて一つの惡い性格が形成される——それは胃さへ壞してしまふのだ。沈默家の全ては消化不良である。諸君は私が、粗野といふことが輕んじられるのを好まないものである、といふことを認めるであらう。それどころではなく粗野といふことは、矛盾が極めて人間的に表示された一つの形であつて、しかも近代に於ける柔軟化の風習のうちにある、私たちの第一位の道德である。——人間が若し粗野を行ふだけに富んでゐるならば、不正であるといふことは一つの幸福である。若しも神が地上に君臨したならば、不正以外のことは決して行ふことが出來ないであらう。罰ではなく、罪を雙肩に擔つて、初めて神的となり得るであらう。

六

憤怒からの釋放と憤怒に向つての闡明——この一點に就ても私は長い間の病氣に感謝すべき任務を持つてゐるといふことを知つてゐる人はあるだらうか。この問題は決して簡單なものではない。人間はその力量からさうしてその弱さからとの二方面から、それを體驗しなければならない。假に病氣といふものに向つて、弱い狀態といふものに向つて、攻擊しなければならない何物かがあるとするならば、それはこの狀態にあつては人間の防

樂本能であるところの、その固有の回復の本能が、非常に薄弱になるといふことにある。人間は如何なる物からも脱却する手段を知つてゐない。人間は如何なる物とも融和する手段を知つてゐない。人間は如何なる物をも撃退する手段を知つてゐない。——全ての物は彼を傷けるのだ。人間と事物とは衝突する位接近する。さまざまの經驗は余りに深く接衝し合ふ。追憶は膿を持つた疵となるのである。病氣は憤怒それ自身の一つである。——この憤怒に向つては、患者は只つた一つの偉大な治療方法を持つてゐる——これを稱して私はロシア的運命論、乃ち抗意を持たない運命論と言ふのだ。戰爭に耐へられなくなつたロシアの兵隊は最後にこの主義の下に雪中に臥するのである。如何なる物をも絶對に受け容れず、如何なる物にも意を用ひず、又如何なる物をも近づかせない——絶對に反應を起さないのである……。死に向つての勇氣であるばかりではなく、生命にとつては一番危險な條件のうちに生命を保持するところの此の運命論の非常に聰明な點は、若しもそれを緩漫に附すれば一つの冬眠の意志となる新陳代謝の減少にあるのである。今少しくこの論理を推し進める時は、一週間も塚穴の中に眠る托鉢僧となつてしまふ……。元來人間といふものは、反應をすると非常に迅速に消耗されるから、絶對的に反應をしないでおく——かういふ理窟になる。またこの世には憤怒の情ほど人間を燃しつくすものはない。煩悶や病的易感性や復讐力の缺亡や復讐慾や渇望や全ての意味に於ての毒素の混合——かうした事柄は疲憊した人々にとつては、一番不利な性質の反應である。神經力の急激な消耗や、害ある分泌の病的な增加、例へば胃にあつての膽汁などは、それに據るものである。病める者にとつては憤怒が如何なる物よりも恐ろしい。——それは病める者にとつての惡であるにも拘らず、哀しいことにもそれは病める人の自然的な傾向なのである。あの深奥の生理學者である佛陀はこれを會得してゐた。衛生學とさへ呼ふべき彼の「宗教」は、基督教のやうな哀れなものと混同されまいがために、憤怒の征服といふことに向つてその功力をば露したのであつた。つまり靈魂をば憤怒から解脱させるといふことが、恢復に對する發足點なのである。「敵意を以てすれば敵意は息まず、好意を以てすれば敵意は息む」

といふのは佛陀がその教への最初の言葉である――これは道德ではない、生理學である。――弱さから來た憤怒は、先づ何人よりも弱者それ自身に害あるものである。その根底に豐かな天分を持つた場合、憤怒は溢れ上る一つの感情である。それを心ゆくばかり支配するといふことが天分の豐かである證明となるくらゐの感情である。私の哲學が「自由意志」の說にまでも侵入して、復讐と怨恨の感情と鬪つたといふ眞面目さを知つてゐる程の人たちは――基督敎に對する鬪ひもその一つの場合に過ぎないが――何故私がこの點に向つて、私の個人的態度を實際的な本能の正確さを、分けても明白に示したかといふことを理解するであらう。私が一個のデカタンスであつた頃、私は上述のやうな感情をば害ありとして退けたけれども、再び私の生活がそれに耐ゆる位豐かになり、誇りを抱くやうになると共に、私はそれ等をば私以下のものとして退けるやうになつたのである。私にして見ると、私が耐ゆることの出來ない狀態や場所や住居や社會を一度與へられてからは、何年かの間これを忍耐强く固執したといふ一事のうちに、今云つた「ロシア的運命論」が明かに出てゐるのである――さうしたといふことは、それ等を變ぜしめるよりも、或はそれ等をば變ずることが出來るものだと思ふよりも――即ちそれ等に向つて抵抗するよりもよかつたのである……。その當時私は、この運命論を破壞したり、或は私自身を强ひて覺醒させるのを、まるで生死に關するくらゐの惡事だと思つてゐたのである。――それは全く長い間生死に絡はる程の危險であつた。自分自らを宿命として考察し、自分自らがそれよりも「別種のものである」ことを望まない――かういふ狀態の場合のかういふことは非常に聰明な事柄である。

七

戰鬪といふものは又別なことである。性質として私は戰鬪的である。攻擊といふことは私の本能の一つである。敵となり得ることを――恐らくこれは一つの强い性格を第一步とする。さうした性格は抵抗が有用であるから、抵抗を求めるのだ。復讐だとか怨恨だとかの感

情が薄弱であるやうに、攻勢の激しい感情はどうしても強いものに包含される。例へて言ふと婦人は復讐心が強い。これは婦人が他の人の苦しみに感じ易いからではあるが、同時にそれは婦人の薄弱にもよるものである。攻撃する者の強さの標準とも言ふべきものは、必然的にその人の持つてゐる抵抗力である。例へば成長といふものは、より強い敵——或は又事件を索め探すことによつて現れる。戰鬪的な哲學者は、事件を索出して、それをば是非に至らしめるからである。なすべきことはどんな場合にも抵抗を抑制することでは なくして、その人のあらゆる力と自由と戰法とを携へなければならないやうな抵抗——對等の敵をば制御することにある。敵と向ひ合ふといふことは、男らしい決鬪の第一要件である。輕んずるといふことは戰ひにはなり得ない。命令的に下目に物を見る時には、戰ひは成り立たない。——私の戰法は先づ四個條に定められてゐる。——第一、私は勝利を得た事柄を攻撃する。——私は場合によつては勝利を得るまで待つ。第二——私はどんなものとも同盟をしない。只私一人が對抗するのだ——只私一個人にだけ關係のあるやうなものに向つてだけ攻撃するのだ。……たとへほんの少しであつても私自身を何の關係もないやうなものに向つては、明らさまにそれと向ひ合つたことはない。これは私の正しい行の軌範なのである。第三、私は個人的な攻撃をしたことはない——私が人を相手にするのは、只捕ふるに困難な危險狀態をば、より明かにすることが出來るやうな、强度の廓大鏡としてだけなのだ。かういふ譯から私は、ダヴイツト・シュトラウスを攻撃したのである。もつと明らさまに言ふなら、獨逸の「文化的」社會で、その光彩の褪せ衰へた書物が喧傳されたといふことをば攻撃したのである。——かうして私は獨逸の文化を現行犯として捕へた。……またさういふ譯で私はワアクナアを非難した。もつと明らさまに言ふなら、小手先の奇用といふことと完成といふことと、そして鈍感といふことと偉大といふことをごつちやにしてゐるわが「文化」に於ける、嘘僞とそして半殺しにされた本能とに對して攻撃したのであつた。第四、私は全て人格上の相違といふものを除外視したところの、あらゆる下等な經驗の過程のないやうなものだけに向つて攻撃をするのだ。一面私に

とつては攻撃といふものは、好意の證據であり、また場合によつては感謝の證據である。私が自分の名をいろいろの事件や人たちに結びつけるこいふことは、私がそれ等に對して敬意を表したり、その功を彰したりするといふことである。それが私の味方であらうこ又私の敵であらうこ、私にとつては同じこことだ。私が基督教と戰ひをする時も、今言つたことを私は認めるものである。こいふのは、未だ私はそれによつて、恐ろしい重大事件とか障壁とかを經驗したこことはなかつたからである。心から眞面目な基督教徒は、いつでも私に對しては好意を抱いてゐた。基督教といふものには、一歩だも退くことをしない敵である私自らは、何千年の宿命であるものを只一人の人間の所爲にして、それに怨恨を抱くやうなことは決してないのだ。

八

私の性格のうちで最後の特異なものであるところの、人こ交際しようこするこ仲々に困難があるこいふここを說べてもいゝだらうか。生れつき私は、本當に恐ろしいほど刺戟を感じ易い純粹な本能を持つてゐる。甚しいこきには、あらゆる靈の接近——何こ言つたらいゝか——奥深い內臟までをも生理的に感じる——その匂ひを嗅ぐくらゐである……。私はかうした敏感に對しては心理的の感覺を持つのである。私はそのためにさまざまの秘密に觸れ、さうしてそれを手にするのだ。教育といふ治療を受けたところの、さま〳〵な性質の根本にかくれてゐる多くの汚れも、そこに恐らく惡血があるためか、私には先づ最初の接近によつて逸早くそれを感じる。私が正しく觀察した時、かういふやうに私の純潔さと一致しない性質は、私の方でもまた嘔氣から來る用心を感じるのだ。だがそれを感じたところで一向に快くはなるものではない。……私が長い間の習慣となつたやうに——私自身に對する極瑞な潔癖は、私の生きて行くべき前提である。私が汚れた事情にあつては死んでしまふのだ。——言はば私は、しよつちう水の中に、何かしら極端に透き通つて輝いた元素の中で、泳いだり浴びたりしてゐるのだ。かうして私にこつては人々この交りが、

非常な試練ともなるのである。私の人情は人と同感するといふことにはなくして、人と同感することを耐えるといふところにあるのだ。……私の人情とは絶えることなき克己である——だが私にはどうしても孤獨が必要である。言はば快活さと自分への復歸と輕く自由に動く空氣を呼吸することが必要である。……わが「ツアラツストラ」の全篇は孤獨の讃歌である。若し人たちが私の言ふことを理解してくれるなら、純潔の讃歌である。……幸なるかな、純潔な痴人の讃歌ではない。色彩を見分け得る人たちは、金剛石のそれだと言ふだらう。——人間に對し「衆愚」に對する嫌厭の情は、いつも大きい危險であつた。……諸君は聽くであらうか、ツアラツストラが嘔氣からの脱却について物語つた言葉を。

どんなことが私に起つたのであらうか。どうして私は嘔氣から逃れたのであらうか。誰が私の目を若々しくしたのであらうか。どうして私は愚かなる人々の泉の側にはない高處に向つて飛走したのであらうか。

私の嘔氣は羽と泉とを豫感する力を與へたのであらうか。いざ私は、再び歡樂の泉を探すために最大の高處に飛走しなければならないのだ。

あゝわが兄弟、私はそれを見出した。今わがために歡樂の泉は、最高の地に湧き出した。しかも愚かなる人々の飲むこともない命である。

歡樂の泉よ、私のために流れるお前は、餘りにも激しくならうとしてゐる。しかもその盃を滿たさうとするお前は、又も度々その盃を空しうする。

私はさうして、心から謙遜りながら、お前に近づくことを學ばなければならない。私の心はお前に向つて、餘りにも激しく流れ過ぎた。

——私の心よ、私の夏はその上に燃えるのだ。短い、暑い、しかも憂鬱で喜び多い夏は燃えるのだ。どんなに私の夏の心は、お前の涼しさを願ふことか。

私の春の、蠶く苦しみは過ぎ去つた。私の意地惡な雪は六月になつて過ぎ去つた。私は明らかに夏となつた。夏の白日とはなつた。

涼しい泉と嬉しい靜寂(せいじゃく)との、高きにある夏よ。あゝわが友よ來給へ、この靜寂のもつと嬉しくならうがために。

さうだ、これは私たちの高き處であつて、しかも私たちの故郷(ふるさと)である。あらゆる不淨な者とその渴き求めるところ、私たちは餘りにも高く險しい地に住んでゐるのだ。

君よ友よ、たゞ君たちの澄んだ眸を、わが歡樂の泉に放ち給へ。どうして泉はそれがために濁ることがあらうか。清く微笑みながら君たちを迎へるであらう。

私たちは未來の樹に巢をくふのだ。鷲はその嘴で、寂しい私たちに餌を運んでくれるだらう。

それこそは汚れたる人々の、共に食べることの出來ない餌である。その人たちは火を食べたと思ふであらう。口を燒いたと思ふであらう。

こゝにこそは汚れたる人々の入るべき家はない。その人たちにとつては、またその人たちの心にとつては、私たちの幸福は氷洞であらう。

しかも私たちは、鷲の友であり雪の友であり太陽の友である私たちは、暴風のやうに彼等の上に生きよう。かうして暴風は生きて行くのだ。

かうしていつかは一陣の風のやうに彼等のうちに吹きすさび、私の精神によつて彼等の精神を奪はう。私の未來はかうありたい。

ツアラツストラこそは、あらゆる低い地に向ふ暴風である。しかも彼はその敵とあらゆる唾はく人々とに嘔吐する人々とに向つて、この忠告をするのだ。「風に向つて唾するのを休めよ」と……

何故私には知慮があるか

一

どうして私は他の人たちよりも多くを知つてゐるのか。どうして私はかうして知慮があるのか。私はこれまで問題以外の問題を考へたことはないのである。――私はこれまで私自身を冗費したことはないのである。――例へて言ふと本當の宗教的困苦を身に笈ふたことはないのである。私がどのくらゐ「罪のある」ものなのだらうかといふことは、私にとつては何の問題でもない。と同じやうに良心の苦しみとはどんなものかといふ、確乎とした基調も私には持ち合せがない。私たちの見聞したところを見ると、良心の苦しみは決して貴いものだとは思はれないのである。……私には行爲といふものを除外することは出來ない。そんなことよりも私は、悪い結果だとかその他さまざまの結果を、根本的に價値問題から離して見る方がいゝ。人が悪い結果に立ち至ると、その行爲に對する正しい見界を、甚だ易々と失つてしまふものである。良心の苦しみといふものは私にとつては、一個の「悪

い見方」であると思はれる。失敗したものを、失敗したといふ故によつて、より以上に尊敬する――この方が却つて私の道徳には交渉があるのだ。私は少年時代にさへも、「神」とか「靈魂不滅」とか「解脱」とか「彼岸」とか言つたやうな純粋な觀念には、どんな注意も暇(いとま)をも與へなかつた――それほど私は少年らしくもなかつたのかも知れない――私は何かの結果としての無神論を少しも知らない。一生のうちの出來事としては尚更だ。私にとつては本能的に明らかなことである。私は餘りに好奇の念に充ち、餘りに懐疑的であり、また餘りに信頼が強いから、粗雜な回答では到底肯んずることが出來ない。神は明かに粗雜な回答である。私たち思想家に向つては、纖細を缺いだ回答である――加ふるに事實私たちに向つては、お前たちは思考してはならないといふ實に粗雜な禁止なのである。物好きな神學者などよりも「人類救濟」に交渉のある事柄であるところの食料問題などは、それなどとは遠つて私には興味があるのだ。此問題を通俗的にこんな形式にしてもいゝ。「お前の力が、復興時代の所謂有徳、道徳味を除去した道徳の最高に到達するには、どういふ風に食餌をとるべきか」――

かういふことに就て私は、よい經驗を持つてゐない。私はこの問題を知ることが大變遲かつたことや、私の經驗から「道理」を學ぶつたことが遲かつたことを意外に思つてゐる。どうして私がこのことに就ては無邪氣なほど古風であつたのだらうといふことを少しく説明するものは、私たち獨逸の文化――「理想主義」の純然とした無價値である。實に怪しけな所謂「理想的」の目標、例へて言ふと「古風な文化」をば――まるで「古風」といふことと「獨逸風」といふことが、一つの概念に和合するのは、固より出來得ないことだと宣告されてゐないかのやうに――それを追究するために、前以ていろんな實在を押し秘してしまふことをも敎へる「文化」なのである。のみならずそれは笑止千萬なものである――先づ「古風な文化的」ライプチヒの人々のことを考へて貰ひたい――全く私は成年に達するまで、毎日粗食ばかりして暮したものだ――道徳流の言ひ方をするならば、料理人とその他基督敎の同胞のために、「非人格的」で「沒我的」でさうして「利他的」なのであつた。例へて言ふと私は、ライプチヒの料理やショウペンハウエルの研究(一八六五年)によつて、眞顔で「生きようとする意

志」を否定してゐたのである。不十分な食料をとつて自分の胃までも惡くする――私の見た所ライプチヒの料理は、實際美事にそれを說明してゐる。(一八六六年に此方面は一變したさうだ――) しかも獨逸の料理の全般に涉つて言つても、何一つとして其重い責任を負はないものとてもない。食前のスウプ(第十六世紀のヴェネヂツヒの料理本には alla tedesca と呼ばれてゐる)煮つめた肉や脂肪と澱粉とでいためた野菜や、さては紙ほどの厚さになつた食事材料の惡くなつたことはどうだらう。若し諸君が古代の、古代に限らず獨逸人が、食後に動物性の飲料を多く飲み足す習慣を考へて見るなら、獨逸精神の據つて來た所も大概はわかる――卽ち大變に惱まされた內臟から來てゐるのである……。獨逸精神は不消化である。どんなものをも消化する事がないのである。――だが獨逸の食事ばかりではなく、一種の「自然への歸着」卽ち人肉食の方へ歸つて行く所の英吉利の食事も亦、佛蘭西の其に比べては私の本當の趣向には反するものである。私にとつては精神の上に純重な足、英吉利婦人の足を與へるやうに思はれるのだ……。一番いゝ料理はピエモントのそれである――

私には酒精飲料は適しない。一日一杯の葡萄酒やビイルは、十分私の生活を「涙の谷」にするのだ――ミュンヘンでは私ごはまるで反對の人たちが住んでゐる。私がこのことを年が行つてから知つたのは知つたのだけれども、大體少年時代からそれを經驗してはゐたのであつた。少年のころ、初め酒を飲むことや煙草を喫ふことは、たゞ若い人たちの見榮ばかりなのだと思つてゐたが、その後それが一つの惡癖なのだごわかつた。勿論この大それた判斷には、恐らくナウムブルヒの葡萄酒も預つて責があらう。葡萄酒が若しも氣持を愉快にするものだご信じようごすれば、私は基督敎徒とならなければならない。つまり私にはまことに不合理なごを信じることになる。不思議にも私は、たくさんに水を混ぜた少しばかりの酒に、大變調子が狂ふにも拘らず、たくさんになつて來るごまるで船暈のやうになるのだ。少年時代私はこれに勇氣を持つてゐた。嚴密で簡潔だといふ一點で、私の手本であつたサルスト(羅馬の史家、紀元前一世紀頃の人―譯者)と筆によつて雌雄を決しようごいふ野心から、或る夜のごこ夜あかしで長い論文を書いては書き直し、さうして一番强いラムと

水との混合酒をラテン文の上へいつぱいに落した。かうしたことは私が尊敬すべきブフオルタ學校の生徒であつた時、私の生理にも恐らくは又サルストの生理にも、最早何の矛盾もなかつたのであつた――尊敬すべきブフオルタ學校に對してはどんなに矛盾ではあつても……。それから中年になつては、私はより心から全ての酒精飲料に反對するやうになつたのである。私を感化したリヒアルト・ワアクナアと全く同じで、私は經驗上菜食主義には反對者であるから、精神的な人々に向つて心から熱心に禁酒を勸めることは出來ない。水はよいものだ……私は至るところ流れる小川から、易々と水の汲める土地を望むのである。小さな盃は私の後から獵犬のやうに伴いて來る。――「酒中に眞理がある」といふけれども、こゝでも私は眞理といふことについて、世の人々と同和しないやうである。――私にとつて精神といふものは、水の上に浮んでゐるのである。もつと私の道德を二つ三つ擧げて見よう。多量な食事といふものは小量に過ぎるよりも消化し易いものだ。全的に胃が働くといふことは、消化のいゝことの第一要件である。人間は自分の胃の大きさを知ら

なければならない。と同樣のわけで、私が尻きれとんぼの供物祭と呼んでゐる、あの長たらしい共同定食には反對すべきことである。――間食は禁物である、カフエーも禁物である。カフエーは人を憂鬱にする。朝だけならお茶は身體にいゝ。少量にして强いのがよい。お茶はほんの少しでも弱過ぎると非常に身體に惡くて、一日中氣持が惡くなる。かういふことには、人によつて各々その標準があつて、その標準は時に非常に細かく、又非常に微妙な關係のうちにある。大變刺戟の多い時候のころには、朝のうちにお茶を用ふるのはいゝ方法ではない。その一時間前に脂肪氣のない濃いココアを一ぱい飲むのがいゝ。――じつとしてゐることを出來るだけ少くするがいゝ。筋肉の貢献の伴つてゐないやうな思想を信じてはならない。すべての偏見といふものは內臟から來るのである。尻の重いといふことは――以前にも一度言つたが――聖靈に對する罪惡である。

土地と氣候との問題は、食料問題と密接な交渉を持つてゐる。どんな人間でも處かまはずに住むといふことは出來ないことである。しかも全力を集注しなければならない大きな任務を携へてゐる人は、この點に一番狹い範圍の撰擇を持つてゐる。人體の代謝機能に及ぼす氣候の影響や、その障碍や、その促進の大きいことは、一旦土地と氣候の撰擇を誤つたならば、どんな人でもその任務から遠ざけられるばかりか、その任務をばすつかりと奪はれてしまふほどだ。かうしてその人は任務といふものと接衝しななくてなつてしまふ。その人の肉體的活力は、誰もが「自分一人これを能くする」と認める境地であるあの溢れ流れて最も精神的となる自由な域に達するほどには、決して大きくはならないものである…

…內臟の故障習慣がほんの少しつくと、天才から一つのいゝ加減なもの、獨逸風なものを作り出すのに十分だ。强大な英雄的な質をさへ持つてゐる內臟を虛ろにするには、獨逸の氣候だけで十分だ。代謝機能の速度は、精神の步調の敏活と魯鈍とに正しく比例するものである。「精神」それ自身が、さてに代謝機能の一つに過ぎない。才分の豐かな人々の居る土地

とか機智や纖細や惡意が幸福の中に數へられた土地や、さては天才が必然的にその氣候に親しんだ土地を列擧して見よ。それ等の土地はどれも皆乾燥した空氣を持つてゐる。パリイやフロバンスやフロオレンスやイエルサレムやアテネ——これ等の名前は天才が乾燥した空氣のために、透き通つた空のために——急速の新陳代謝によつて、强大な驚くべきたくさんの力を、絕えず取り入れる可能性によつて規定されてゐることを證明してゐる。强く自由な素質のある人たちが、ただ風土についての本能の敏感を欠いたために、狹苦しい無味な專問家や變窟になつた例を、私は度々目擊したものだ。さうして若しも病氣といふものが私をば理性の方へ、實際に理性を考へるといふ風に持つて行かなかつたならば、私自身もやがてはこの御多聞に洩れなかつたかもわからない。長い間の練習で、氣候や氣象的誘因から來る結果を、まるで鋭敏な信ずべき機械のやうに、私自身の身體で知つたり、或は又チウリンからマイライドまでほどの短い旅行の時にさへも、空氣の濕度の變化を私自身の身體で測るやうになつた今、私の生命が危機に瀕した年月に至る最近十年間、嘘僞なそし

て私には嚴禁されてゐる土地で、いつも私の生活が營まれてゐたかと思ふと、恐ろしくで慄へてしまふのである。ナウムブルク、シュウプフオルタ、チュウリンゲン全體、ライプチヒ、バアゼル、ヴエネジツヒ、これ等は全て私の生理狀態には非常に不適當な土地なのだ。私が少年時代と青年時代のすつかりに、樂しい追憶を持つてゐないとしても、それを所謂「道德的原因」——好伴侶を持つてゐなかつたからだといふ必然的の事實の故だとするのは愚かなことであらう。何故なら、この缺點は今も尙以前と變りがないからである。さうして私の愉快で勇悍なのを妨げたことはない。けれども生理上の事柄についての無智——呪はれたる「理想主義」は私の生活にあつての本當の惡運である。——私の生活に於ける餘贅で迂愚なもの、それによつて何の利益も生じないでその代り又何の埋め合せも何の報償もないものである。一生涯の任務から私を引き離したあらゆる誤謬や、またあらゆる本能の迷錯や謙讓、例へば私が言語學者となつたことを、私はこの「理想主義」の結果だと認めるのである——どうして私は、せめて醫師だとか、その他少したりとも「目を開く者」

とはならなかつたのだらうか。私のバアゼル時代には、全て精神上の過程は毎日の日課表とともに、無意味な力の徒用だつた。消耗を償ふ力素の移入もなく、まだ消耗と供給についての知識さへもなかつたのである。鋭い自己意識や、さては指揮本能を養ふといふやうなことば、全然皆無であつた。それは「沒我」卽ち自身と他人とを對等にすることと、自身と他人との距離を忘れることであつた。私がすつかり行きつまつた時、行きつまつたればこそ私の生活のこの根本的な間違ひ——「理想主義」——をば考へ始めたのだ。病氣は初めて私をば、理想へと導いて行つたのであつた。

三

食料の撰擇。氣候と土地との撰擇。第三にはどんなことがあつても誤つてはならないものは、その人の休養法の撰擇である。これも矢張精神が獨自の性質を持つ程度に從ひ、許されるものなのである。言ひかへれば必要なものの限界は、だん〳〵その範圍が狹められる。

である。讀書といふものは私にとつては休養であつて、私をば自己から脱却させるもの、私をば他の人間の知識や靈の中に散策させるもの――私がもう力こめて行はないものに屬するものだ。讀書といふものは私をば勤勞から回復さしてくれる。大變に勞作をしてゐる時には、私の側には書物は見られない。どんな人とも近くで話をしたり、また少しでも考つたりさせないやうに注意をするのだ。かういふのは讀書を指すのである……懷姙といふものが只精神ばかりではなく、その根底に於て全ての組織に強い緊張狀態の宣告を與へるがために、偶然の事件や外界から來るさまざまの刺戟が、餘りに激しく働いたり、餘りに深く「刻み入る」といふことを、諸君は認めたことはないだらうか。人間は出來るだけ、事件や外界からの刺戟を避けなければならない。自分の周りに壁を廻らすといふことは、精神的の懷姙についての第一の本能的思慮である。他の人たちの思想がそつと壁の上に攀づるのを、私は默つて見てゐるだらうか。――これも亦讀書のことである。……勞作と收獲の後には休養の時が必要である。この時にこそ君たちとともに、愉快な奇拔な聰明な書

物といつしよに居よう――それは獨逸の書物のことであらうか……。書物を手にした私を考へようとすると、半年前に溯らなければならない。全くそれはどんな書物だつたか――ヴイクトル・ブロシヤアル Victor Brochard の勝れた研究である希臘懷疑家 les Sceptiques Grecs の中には、私のラエルチナ（この希臘の哲學者についての研究を、ニイチエは公にしたことがあつた―譯者）が十分に利用されてゐる。懷疑家、一つどころか五つまでも心を持つてゐる哲學者といふ人々の中で、只つた一つ貴重な型……。そのほか私はいつも同じやうな書物のうちに、極く小數のそれのうちに、私にとつてはつきりと利するところの多い書物のうちに、私の隱れ家を作るのである。量たくさんに種類たくさんに讀むといふことは、私の性格には適しないのである。圖書室といふものは私を病氣にする。たくさんの量やたくさんの種類を愛するといふことも、また私の性格には適しない。新しい書物に對しての用心、ではない敵意は、「寛大」とか「度量」とかそのほかの「隣人愛」よりも、もつと私の元來の本能である……。度々私の歸つて行くのは、きつと前時代のフランス人のうちの少數

だ。私は只フランスの文化だけを信じるものだ。さうして獨逸の文化については言はずもがな、その他ヨオロッパで「文化」と呼ばれる一切のものを、私はそれを誤りだと認めるものである……。私が獨逸の國で見出したところの高い文化の少しばかりの例は、その源をフランスに發してゐる。わけても趣味の問題については、かつて耳にしたうちで、群を抜くこと遙かである第一流の聲、ワアクナア夫人のコヂマのやうなものは、さうした理である。——私が肉體的から心理的にだん〳〵に殺された、教訓たつぷりな基督教の犠牲として、またこの不人情な殘酷極る形となつて現れた全ての論理的道程として、パスカルを讀みはしないが好きであつたことや、私の精神のうちに、恐らくは肉體のうちにモンテエヌの皮肉のどれほどかを持つてゐるといふことや、さては又私の藝術家としての趣味が、シエイクスピイアのやうな天才に向つて、モリエイルやコルネイユやラシイヌの名前を辯護するに當り、未だかつて怒りの感の起らないことのなかつたこと、かう言つたことは、私には最近のフランス人も亦心を引く友ではないといふ除外例を作ることにはならないのである。全く私は今日のパリイのやうに、好奇心たつぷりで鋭敏な心理觀察者をば、一眺めに眺め得るやうな時代を、歴史上のどんな世紀にも見出さないのだ。試みに——この人たちの數は至つて少くはないのだから——ボオル・ブウルゼエやピエル・ロチイやヂブ・メエヤツクやアナトオル・フランスやジュウル・ルメエトルの諸君、或はまた（特にこの強勢な種族の一人を示すため）私の特に愛してゐる本當のラテン人であるグイ・ヅ・モオパスサンを擧げよう。全く私はこの時代の人たちを、皆すつかり獨逸哲學のために災された（例へばテエン氏はヘエゲルのために。氏が偉大な人間と時代とを誤解したのはヘエゲルのおかげである）彼等の偉い先輩たちの上位にさへも置くものである。獨逸の國境の及ぶ限り文化を亡ぼしてしまふのだ。フランス精神を初めて「救つた」のは戰爭である……。私の生涯で一番美しい遭遇の一つであるスタンダアル——私の生涯に一時期を劃するやうなものは、皆偶然に來たものであつて推擧されて來たものではないから、遭遇といふのだ——は非常に貴いものである。その何物をも第一に見透す心理觀察者の目によつて、最も偉大な

實行家の近く居るのを思ひ出させるその事實の把握力によつて。正直な無神論者としての——フランスでは稀な、その例の非常に少ない人——プロスペル・メリメエに對して、最後にして最小ではない敬意を表しよう……。恐らくは私自身でも、スタンダアルをば妬んでゐるかもわからない。彼は私がきつと作ることが出來たらうと思はれる無神論者の機智の優れたものを、私から奪ひとつたのであつた。それは「神の只一つの辨疏は、存在してゐないといふことだ」といふ言葉である……。私自身もどこかでこんなことを言つたことがある。今まで、生存への最大の反對は何であつたか。即ち神……。

四

抒情詩人の最も高い概念を私に與へたものはハイネであつた。古今萬國を通じて、それに對等するやうな甘味のある情熱的な音樂を求めても駄目だつた。彼は神のやうな惡意を持つてゐる。私はこの惡意といふものを考へないで完全な者を考へることは出來ないのである。——私が人間や種族の價値を評價するには、彼等が神といふものと半獸人とをどれだけ離して考へ得ないか、といふその程度によるのだ。——しかも彼はどんなに自由に獨逸語を用ひたことか。ハイネとさうして私とが、一獨逸人が獨逸語を用ひたどんなものよりも、量り知れないほど遠ざかつた第一流の獨逸語藝術家であつた、と言はれる時があるだらう。——バイロンのマンフレッドと私とは餘つ程近いに違ひない。私はこの作品の中のさまざまな暗い深淵を私のうちに見出すのだ——私は十三歳にしてこの作品に心を奪はれてゐた。マンフレッドの前で、强ひてファウストを喋々する人には、私は一言も語らずに只一瞥を與へるばかりである。シュウマンは獨逸人に偉大の觀念を持つ力がないといふことを實證してゐる。下劣なこのサクスン人に對する憤慨のために、私は特にこれに對するマンフレッドの前奏を作曲した。するとハンス・フォン・ビュウロウ Hans von Bulow は、こんなものは音譜紙の上に見たことはない、それは叙情詩神(オイテルペ)への反逆だと言つた。私はシェイクスピイアへの最上の言葉を探すと、いつも只彼がケェザアの型體を案出したと

いふことだけを見出す。こんなことは決して人の想像することの出來ないことである――人はさうか、さうでないかである。偉い詩人は只その現實だけで創造するものだ――その激しさはその後となつて自らの作品に耐えることが出來ないほどだ……。私が「ツアラツストラ」を一寸見ると、もう半時間も部屋の中をぐるぐると歩き廻つては、湧き上る咽び泣きの發作を制へることが出來ない。――私はシェイクスピイアのやうな腸を斷つ物語を見たことはない。かういふ風に必ず道化者とならなければ、どんなにか人は苦んだに違ひない。――諸君はハムレツトを理解するか。人間を發狂させるものは疑問ではなくして確答である……だがこれを感じるためには、人は深くなければならない。深淵であり、哲學者でなければならない……私たちは全て眞理を恐れてゐるのだ……。私は告白しよう、私はベエコン卿がこの最も不愉快な文學をば、自ら作つて自ら虐げてゐる人だといふことを、本能的に本當だと思ふのである。あのアメリカのごた〳〵とした淺はかなお喋りなどは、私には何の關するところでもない。力强い現實を捕へる視力は、行爲、驚くに足る行爲や罪惡を形づくる力と一致するばかりではない、まことに後者そのものを前提とするのだ……。第一流の現實主義者であるベエコン卿については、彼のやつた一切のことや彼の思つた一切のことや、さては彼が自ら經驗した一切のことを盡く知つても、リアリストといふ言葉の持つてゐる全ての偉大な意味に於ては、私たちは彼を知つてはゐないのである……。禍なるかな、わが批評家諸君。私が若し「ツアラツストラ」をば他の人の名前、例へばリヒアルト・ワアクナアのそれで著したとしたまへ。「人間的な（メンシュリヒス）、餘りに人間的な（アルツウメンシュリヒス）」の著者が、ツアラツストラの幻想者であることは、二千年の間の鋭い眼さへ、尙それを想像することは出來なかつたであらう。

五

休養といふことについて物語つてゐるこの際、私の生涯に一番深く一番心から私を休養さしてくれたものに向つて、私は感謝の意を表するがために　是非とも一言云はなければ

ならないのである。それは疑ふこともなく、リヒアルト・ワアクナアミの親しい交際であつた。それより他の人間的交渉を私は輕く視てゐる。けれども私は如何なる價に代へても私の生活からトリブシエソ時代の信に篤い、愉快な、そして崇高な出來事を——さまざまな深い刹那の日を取り去つてしまふことは出來ないのだ。ほかの人たちがワアクナアについてはどんなことを經驗したかは知らないけれども、私たちの空には一かたまりの雲さへも只の一度も通つたことてはなかつた。さて、再びフランスのことに歸らう——ワアクナア黨とかワアクナアを自分たちと同じやうに見ることによつてワアクナアに敬意を表してゐると信じてゐる全てこの種類の人たちには、私は兎や角うの譯はなしに、ただ口を曲げなから輕蔑の意を表すだけだ。生れつき一切の獨逸風なものとは緣が遠く、しかも一度獨逸の人間に出合ふと腹の消化が惡くなるくらゐのことつて、ワアクナアミの初めての遭遇は私の生涯に初めてほつと息を入れた時であつた。彼を感じ、そして彼を敬つたのは、外人として、全ての「獨逸の諸道德」への反抗として、具體的の反抗としてであつた。——

千八百五十年時代の泥沼のうちにその少年時期を送つた私たちは、「獨逸」こいふ概念に對しては、どうしても惡い感じを抱くのである。どうしても私たちは、革命家にならないではゐられないのだ。——私たちは私たちの上に、神聖ぶる人のゐるやうな有樣を許さないであらう、かういふ人々が現在緋の衣を着たり、漂騎兵の制服を身にしたり、或はまたそのほかの着物で世に立たうとも、私にとつては何の問題でもあり得ないのである……。さうだ、さうしてワアクナアは革命家だつたのだ——彼は獨逸人から逃れたのであつた。ヨオロッパに於ての藝術家の鄉土は、バリイよりほかにはないのである。ワアクナアの藝術の前提となつてゐる五つの藝術的感覺、その陰影に對しての感覺、心理上の病的な性質などは、只バリイにあつてだけ見出されるものである。技巧の問題にあつてのこの情熱や、舞臺裝置にあつてのこの眞摯は、バリイ以外にはどんなところでも見られないものだ——特にこれはバリイ人の眞摯である。バリイの藝術家の心の中に巢をくつてゐる恐ろしい野心については、獨逸にはそのどんな概念を持つてゐるものさへゐない。獨逸人はお人好し

である――ワアクナアは決してお人好しではなかつた……。だがワアクナアがどういふ方の人間か、或はまたどんな人間と一番密接な交渉があるかといふことは、これまでにすつかりと說たべ。(「善惡の彼岸」二五六頁以降) それはフランス後期ロマンチシズムである。その本來病弱不治の基調を持つてゐるてしかもどこからどこまでも表現上の狂熱家であつて、ちやうど藝術家肌のドラクロアやベルリオズのやうな藝術家のやうに、高く飛び猛く踏り上らうとする藝術である……。ワアクナアの最初の聰明な後繼者は、そも〳〵誰であつたらうか。それはシヤルル・ボオドレエルである。初めてアラクロアを理解したところの、一代にして全ての藝術家の影を映じてでもゐるやうな、あの模範的なデカダンスである。――恐らく彼は、かうした藝術家の最後のものでもあつたのだ……。私がワアクナアに向つて許さなかつたものは何であらうか。彼が身を卑くして獨逸人となり下つたこと――彼が獨逸帝國の人民となつたことである……。獨逸の國境の及ぶ限り文明を亡して行く――

六

あらゆることに考へを廻らして見ると、私はワアクナアの音樂なくして、その青年の時代を送ることは出來なかつたであらう。獨逸人に對して、私はすつかりとその望を失つたからである。若し人がはげしい壓迫から逃れようとするにはハシツシュが必要である。ワアクナアはあらゆる獨逸風な毒素を消すところの、非常に効力のある毒素である――毒素だといふことには、私は喋々しない……。「トリスタン」のピアノ曲が出來た時以來――それについてはフオン・ビユウロオ君へ感謝する――私はワアクナアの仲間であつた。私はそれ以前のワアクナアの作品はそれ以下に見た。――といふより餘りに通俗的で、しかも餘りに「獨逸風」であつたのである……。だが「トリスタン」と對等するやうな非常な魅惑力や、或はそれと對等するやうな物凄くて快い永遠性を含んでゐるやうな作品を、今日も尙私は求めてゐるのだ――私はあらゆる藝術のうちにそれを求めたけれども無駄であつた。

レオナルド・ダ・ヴインチのあらゆる特異な性質も「トリスタン」の初めの調に比べるならば、その魅力を失つてしまふのである。この作品こそはワアクナアの中で「上乘なもの」だ。この作の後に彼は、「マイスタアジンガア」とか「リング・デス・ニイベルンゲン」などの作品で身を伸した。健全になる——ワアクナアのやうな性格の人には、かうしたことは言ふまでもなく退嬰なのである……。私はこの作品を心から味ふことが出來るやうに、ちやうどい〻時期に生活し、しかも又ちやうど獨逸人のうちに生活してゐたといふことを幸に思ふものである。私が心理觀察者としての好奇心はそれくらゐだつた。かうした「地獄の喜び」を喜ぶべく病的でない人々にとつては、この世界はつまらないものである。神祕的な言葉を使ふといふことは、こゝでは許されることではなくして、強制されることなのである——ワアクナアが得意とする特異な技術彼以外にはどんな人間も飛んで行くことの出來ない稀に見る深い喜びの世界をば、私はどんな人たちよりもよく知つてゐると思つてゐる。現在私は、一番疑はしいものや一番危險なものさへも、利用して一層に強くなるほどに強いけれども、一面で私はワアクナアを私の生涯の大恩人だと呼んでゐる。私たち二人が密接に取り結んだ交渉や、また私たち二人が同時代の人たちの耐へることが出來たよりも、もつと深い苦しみに耐へることが出來たといふことは、私たち二人の名前をば、いつも新しく結びつけることであらう。さうしてワアクナアがちやうど獨逸人たちの中では、只の誤解に過ぎなかつたやうに、私もまた同じくさうである、永遠にさうであらう——わが獨逸人諸君、何はともあれ二百年の間、心理的と藝術的との訓練をしたまへ……。だが失はれた時への取り返しはむづかしい——

七

もう一言だけ私は、一番選ばれた私の讀者のために、私は心から音樂に向つて求めることを告げておきたい。それは十月の午後のやうに、しかもさうして深味のあるべきこと。獨創的に、翻放に、優美な謙讓な柔順な可憐な少女のやうであるべきこと……。音樂とはど

ういふものであるかといふことを、獨逸人が知つてゐることは言はせない。人々が獨逸の音樂家だと呼んでゐるもの、とりわけその優れたものは外國人なのである。スラヴ人やクロアチア人やイタリイ人やネエデルランド人――或はまたユダヤ人なのである。でなければハインリッヒ・シュツツやバッハやヘンデルのやうに、もはや亡びてしまつたところの強い種族の獨逸人なのである。私自身は、何と言はうと一個のボオランド人であつて、ショパン一人だけあつたなら、そのほかの音樂は省みる必要はないと思ふくらゐのそれである。ワアクナアの「ジイグフリイド・イディル」とさうして管絃樂の調子では全ての音樂家の群を拔いてゐるリストの作品の二つ三つと、最後にアルプスの向方(むかふ)――ではなくアルプスの此方(晩年のころニイチエはイタリイに住んでゐた。ドイツからはアルプスの向方側に當る――譯者)に育つたすべての音樂を、私は三つの理由から例外とするものである。私はロッシニイを除外することは出來ないだらう。私たちの音樂に於ての南國人であり、私たちのヴエネジヒの音樂師であるピエトロ・ガスチを除外することは尙更のことである。私がアルプスの向方側と言つたのは、ほんたうに只ヴエネジヒを指して言つたのであつた。私が音樂の別名はと探す時には、只ヴエネジヒの名前があるだけである。私には涙と音樂との間に區別はない。――私は心に恐ろしい慄へを感じないで、幸福といふもの南方といふものを考へることは出來ないのである。

私は橋の上に立つた
近い頃褐いろの夜に
遠くから歌は來た
黃金の滴は滴り流れた
ふるふ水の上(へ)に
ゴンドラと灯(ともし)と樂(しらべ)のひびき――
醉ひつゝ薄闇の彼方へと泳いで行つた……

私の魂、七絃の琴
心のまゝに物觸れて歌つたなら
ひそかにゴンドラの唄がそれに合せる
華やかな幸に慄えながら
――それを耳にしたものは誰だ……

八

これまでに物語つた全てのこと――食料や風土や休養法の撰擇――を支配するものは、自己防衛の本能として一番明らかに現れた自己保存の本能である。そのたくさんを見せないこと、聽かさないこと、近よらさないこと――これは第一の知慮であつて、また人間といふものが偶然ではなくて必然だといふ第一の證據なのである。この自己防衛の本能を現

すものは、通常氣品といふ言葉である。「さうだ」と言ふことが「自己棄却」である場合に、氣品といふものは「さうではない」と言へと命じるばかりではなく、また出來る限り少く「さうではない」と言へと命じるものである。「さうではない」といふ場合が常住くり返し〳〵されるやうなことからは、自分を引き離さなければならない。防衛の出費がどんなに小さくとも、それが常習となり習性となつたその曉には、大きな餘計な損失の原因となるといふこころにこの主義の理窟があるのである。大きな支出とは、小さな支出が度々にその度を重ねることである。防衛、卽ちどんなものをも近づけないといふことは一つの出費なのである――このことについて人は自らを欺いてはならない――消極的の目標に向つて冗費された力なのである。絶ゆることなく防衛する必要があるために、人はその上防衛の出來なくなるくらゐに弱つてしまふことがあるのだ、――例へば私が家を出て、靜かで貴族的なツウリンではなく、獨逸の小都會をば見たことするか。小つぽけな、壓迫を受けた世界から侵入して來る全てのものを擊退するがために、私の本能はそれに抵抗しなければな

らないだらう。或はまた私が獨逸の大都會、そこでは生長するどんなものもなく、又善いものも惡いものもすつかり持ち込まれて來るその厄介な建物をば見たことするか。それがために私が、猶(はりねうみ)となつたらいけないだらうか――だが、一つの針をも持たないで手を開いてゐることいふ自由があるならば、針を携へるといふことは一つの費えである、しかも二重の贅澤である。

今一つの知慮と自己防衛は、出來るだけ少く反應することと、それから「自由」と「發言の權利」とをないがしろにして只反應を示すところの試し藥となれなどと無理な命令を受けるやうな地位と條件とから、免れることだ。これを書物との交渉から例を引いて見よう。只全くたくさんの書物を「ばら〳〵とやる」だけの學者――凡庸な知識を持つてゐる言語學者は、殆んどその日〳〵に二百冊の書物を繙く――はやがては自分で考へることいふ力をすつかりと失つてしまふのである。書物を繙かなければ考へることはしないのだ。その考へるのは、その刺戟に向つて答へるのである(――讀んだところの思想に向つて)――結局

單に反應するばかりのことである。學者はその全力をば肯定と否定とに、つまり考へ終られたものの批評に費してしまふ――しかも彼自身はもう考へることをしない……。自己防衛の本能は彼には弱くなつたのである。さうでないとすれば彼は書物に向つて、自らを守護するわけである。學者卽デカタン――このことを私は目の前に見た。天賦のある、豐かな自由な素質のある人たちが、三十歳のころには「哀れにも本を讀み」さうしてほんの火華ほどの――「思想」を與へるにも、人に擦つて貰はなければならない燐寸ほどのものとなつた。――人間の力の非常に快く輝き始める夜の引き明けに書物を讀む――かういふことをこそ、私は惡德と呼ぶものである。

九

人間はどうなり行くか、人間とはどんなものであるか、といふ問題への本當の回答を、今や避けられなくなつた。それから私はとりわけ優れた自己保存――自利の方法に及ぼさ

う。任務、それが當り前の程度よりも非常に大きいと假定するならば、自分自身をこの任務に面接させるより大きな危險はないであらう。人がその現在の狀態になるといふことはその現在の狀態についてはほんの微かな豫感さへ感じないことを前提とする。かういふ見方によると、生活の誤謬さへも、また一時的の側道や横道や躊躇や謙遜や、その人の任務とは交渉のない任務に冗費されたところの熱心さへも、それだけで意義や價値を持つのである。大きな知慮や更に又最も大きな知慮は、かうして誤の中に表れて來るのである。

「汝自らを知れ」といふ格言が沒落に導く處方であるならば、却つて自己忘却や自己誤認や自己委縮や自己凡化は理性それ自身となるものである。隣人愛とか他人他物のためのめ生活は、道德的に表すならば深い利己主義を持ちこたへるべき防禦方法ともなることがあり得るのだ。これは私の法則と信賴とに反して、「自己棄却」への道程の味方となるところの例外の場合なのである。かうした道程は自利と自己訓練との役目をしてゐる。人は意識の全表面を——意識は表面である——どんな力ある强制にも浸潤されないやうに、

純粹に持ちこたへなければならない。全ての偉大な言葉や、又全ての偉大な態度にさへも用心しなければならない。餘りにも早く本能が「自分を理解する」ことは非常に危險なことである。組織を與へるものであり、指揮者の役をする「觀念」といふものが、そのうちにだん〳〵と內部に首を擡げて來る——この觀念が强制し始めるのである。だん〳〵にそれは側道や岐れ路から引き戻して行く。いつしかそれは、全てに對する手段として缺くことの出來ないものだといふことを示すべき性質と能力とを準備する——「終局」とか「目標」とか「意義」とかといふ主要な任務について、それは何かしらの言葉を言ふに先だち、次第にさまざまの役目を演ずる力を成育させるのだ——かういふ方面から考察して見ると、私の生活に非常に驚くべきものがある。恐らく價値轉換の任務には一個人のうちに相並んで存在するより以上の力が入用であつた。わけても亂し破ることなく、さまざまの力が對立する必要があつた。さまざまの力をば敵對させないで分離させる方法や、何んなものも混ぜ合はさないで、どんなものをも融和させないことや、或は又驚くほどの「多數」ではありなが

ら渾沌とはしてゐないこと――それ等は私の本能の先立つての條件、長く隱れた働きと技巧とであつたのである。私はどんな場合でも、私の內部に育つて行く者をば、只豫感さへしたことのない程、本能の保護力は優れてゐるのである――しかも又、私のあらゆる力が成熟しつくした完成しつくした狀態で、思ひがけなくも急激に活躍するといふほどに、强く現されるのである。私が苦しんだといふことは私の追憶にはない。――苦鬪努力の跡かたは、私の生活のうちには見出されない。私は英雄的の性格とは反してゐるのだ。何かを「意欲し」たり、何かに向つて「努力し」たり、或はまた一つの「目標」や一つの「希求」を目あてにする――といふやうなことは、どれも〳〵私には經驗したことがないのである。さういふ瞬間でも、私は矢張私の末來――まことに遠い末來――をば、滑らかな海のやうに見渡すのである。その海の面に波よせるほどの、どんな希求もない。何かがその實際にあるよりも別なものになるといふことは、私の望むところではない。私自身が別なものにならうとは思はない……。私はこの通りにずつと生きて來たのである。四十四年の生活を通じて名のために女のために金のために、苦しんだことはないと言へる人間――だがかうしたことが私にはなかつたのではなかつた……例へば私が大學教授になつたのもさうである。――夢にも私はそんなことをば考へたこともなかつた、私はやつとその時二十四歳であつたから。それから二年前のある日、私の初めての言語學上の勞作が私の先生のリツチュル Ritschl によつて、その雜誌ライニツシエス・ムゼウムへ發表を懇請されたといふ理由で私が言語學者となつたのもさうである。(リツチュルは――敬意を表して言ふ――私がかつて出會つたうちで、只一人天才的な學者だ。私たちチュウリンゲン人の特長で、彼は獨逸人をさへ同感させるほど、愉快な惡氣があつた――私たちは眞理に到達するにさへ間道をとるのである。私はかう言つたとて、私の同鄕人、賢明なレオポルト・フオン・ランケを惡く言つたわけではないのだ……)

——どうして私がこんな些細な、しかも從來の判斷に從へばどうでもいゝやうな事柄について物語つたのだらうか、と人々は尋ねることであらう。若しも私に大きな問題を指示する任務があるとすれは、好んでかういふことをするといふことは、私自らを毒するものに違ひない。そこで私は答へる、かうした些細な問題——食料とか風土とか休養法とか自利とかの全ての細說——は、曾て重用だと思惟された全ての事柄以上に、到底考へを廻らすことの出來なかつたほど重大なそれであると。必ず人はかういふことをば先づその第一の仕事として、それから新しく修養のやり直しをしなければならないものである。人々がこれまで首を捻つて考へたものは、決して實在のものではないのである。それは只想像に過きないことであつて、嚴密に言ふならば、病的な、さうして深い意味では有害な性質の人の惡い本能が釀したところの嘘僞に過ぎないのである。——「神」とか「靈」とか「道德」とか「罪惡」とか「彼岸」とか「眞理」とか「永遠の生命」とか言つたやうな全ての觀念がこれであるさうして人々は人間性の偉大とか、その「親聖」をば、かうした事柄のうちに求めた……。

政治とか社會の秩序とか全ての教育問題は、根本的に一番有害な人間をば偉大な人間と認めたために——事實は人生の基本的な問題である「些細な」事柄を輕視することを敎へたために、嘘僞化されてしまつた。今までに第一流の人物として敬はれた人間と私とを對照して見ると、その區別はまことに歷然としたものがある。かうした所謂「第一流」といふものを私はてんで人間の數には入れないのだ——私から見るなら、彼等は人類の排出物である。病患や復讐心に富んだ本能の產出である。彼等はまるでつまらない、根治することの出來ない、人類に仇をする怪物なのだ……。私はその反對でありたい。あらゆる健やかな本能の標示に向つては非常に鋭敏だといふところに私の特權はあるのだ。私にはどんな病的な痕跡もないのである。私は重い病氣の時にさへも病的にはならなかつた。私の本質といふものから狂熱の跡を見ようとしてもそれは駄目だ。私の生活のどんな瞬間からも、人はどんな高慢な或はどんな感傷的な態度をも見出すことは出來ない。態度の悲痛は偉大の理由ではない。すべてに態度といふものを考へのうちに入れなければならない人は嘘である……。

すべての繪模樣風な人間を警戒しなければならない。――私にとつて人生といふものは易々としたものとなつた。若し人生が私に向つて至難であることを望んだ場合は、一番易々としたものである。どんな人々も今は私に倣はうとはしない――いや、この秋の七十日間といふもの、典型といふものを少しも示さない第一流の事柄のみ絶え間なく行つてゐた私を若し誰かが見たならは、その私にはどんな情熱的なものゝ跡もなく、それどころか溢るゝばかり新鮮な快活な氣魄を見ただらうし、またそれをば今後の私のために責任を持つてくれただらう。これ以上に愉快な氣持で食事をしたこともなければ、まだこれ以上に快く睡眠をしたこともなかつたのである――大きな任務といふものに對しては、私は遊戯よりほかの手段を知らないものだ。これは偉大の標示としての根本的な前提である。ほんの小さな壓迫や、暗い表情や、硬ばつた音調でさへも、人間に對する妨害である。しかもそれ以上に彼の勞作に對する妨害はどれほどか量り知れない……。人は神經といふものを決して持つてはならない……。淋しいことに苦しむといふのも亦一つの妨害である。私はいつ

もフイイルザムカイト Vielsamkeit（多面的性格。本能の價値轉換の迅速多種であることを現したニイチェの造語―譯者）にだけ苦しんだ……。七歳といふやうな本當には思へないほどの小さい頃に、もう私は人間の言葉が私には及ばないだらうといふことをわかつてゐた。かういふことを悲しく思つた私を知つてゐる人はあるだらうか。――今も私は全ての人々に對して、同じやうに鄭重な態度をとつてゐる。一番低い人たちに對しても、私は心から尊敬の念を抱いてゐるのである。さうしてそこにはほんの少しばかりの高慢や蔑視はない。私から蔑視されたのだと一人定めをしてゐる人をば私は蔑視するものなのだ。只私は存在してゐるといふだけで、私は惡血を身に藏してゐる人たち全てを慌てさせる……。人間の偉大といふものを表はす私の標語は「運命を愛せよ」amor fati である。人間が如何なる別なものをも持たうとはしないこと、前にも欲せず後にも欲せず、さては又永久に欲しないことである。只それに耐ゆるはかりが必然性を帶びたものではない。それを隱すのは尙のことだ――全ての理想主義といふものは、必然性を帶びたものに對する一つの嘘僞なのである――卽ち

必然性を帯びたものをば愛しなければならないのである。

何故私は良書を書いたか

一

私は一つの存在物である。私の著作もまた一つの存在物である。――私はこれ等の著書そのものについて物語る前に、これ等の著書に與へられる理解不理解の問題について一言する。私はなるがまゝに任せて、如何にも翻放にこの問題を扱つて見よう。何故かと言ふこの問題は現在時機尚早であるからである。まだ私自らの時期が到來してはゐないからである。或る人たちはその死後に於て誕生するのだ――人々はいつの日にかは、私の考へる通りに生活し又私の考へる通りに教育したりするいろいろの設備を必要とする時が來るであらう。恐らくその時には「ツアラツストラ」の解説のために、特別講座が設けられることもあるであらう。だが今早くも私が、私の眞理に與へられるところの耳とさうして手とを希ふなら、私には純然たる矛盾であるだらう。現在人々がそれに耳を貸さないことや、さては人々が私から受ける道を知らないことも、私にはよくわかることであるばかりか、

また至極なことだとも思はれるのだ。私は誤解されたくはない――そのためには私が私そのものをば誤解しない必要がある――もう一度繰り返して言ふが、私の生活には「悪意」といふものはまるで指摘が出來ない。また文字通りの「悪意」といふものについては、何一つその實證を擧げることは出來なかつた。これとは反對に純然とした暗愚に出會つた例は山ほどある……。若しも何人かが私の一つの書物を手にする時私はそれが私にその人の表すことの出來る非常に稀有な尊敬だと思はれるのである――その光榮を受けるがためにその人は靴を脱ぐ――長靴とは言はないが――であらうと私は思ふのだ。いつかハインリッヒ・フオン・シュタイン博士が明らさまに、「ツアラツストラ」の中の一語さへ不可解だと愚痴を言つた時、それは當然のことだと私は答へた。その中の六つの文章を解したといふことは――體驗したといふことは、「近代人」が到達したよりも、もつと高い人間の階梯に高めるものだと言つた。私がこの距離を感じてゐながら、私の知つてゐる「近代人」から只讀まれるといふことだけを、どうして望むことが出來るであらうか。――私の勝利はショウペンハウエルのそれとは全然反對であつた――私は「今日も讀まれず、明日も讀まれず」non legor, non legar. と言ふのだ。――私は私の著書に向つて、度々無邪氣に加へられる否定の言葉が、私に與へたところの滿足をば、輕視しようとしたわけではないのである。重い、餘りにも重い私の文學が、他の全ての文學との竝行を十分に破ることが出來た折も折、ちやうどこの夏ベルリン大學の一教授は、私に向つて親切にも、こんなものは誰も讀まないからもつと他の形式を用ひた方がいゝ、といふことをわからせようとした。一番お終ひに極端な二つの實證を示したのは、獨逸ではなくしてスウイスであつた。ヴィットマン Widmann 博士が「善惡の彼岸」について「ニイチエの危險なる書物」といふ題で「ブンド」の誌上に掲げた論文や、同じ「ブンド」に發表されたカルル・スピッテラア Karl Spiteler の廣く私の著書に渉る全論は、私の生涯に於いての極大限である――どんなものゝ極大限かは遠慮して言はないでおく……。後者は一例を以てすると、私の「ツアラツストラ」をば進歩した文章の使ひ方として扱ひ、今後内容にも心を用ひて貰ひたいといふ注文を私に附

け加へたのであつた。私が全てのいゝ程度の感情を排するために努力した勇氣を、ヴィットマン博士は尊敬した。――これ等の文章は小さな「偶然」の翻弄によつて、私が讃嘆しないではゐられない正しい形を備へ、しかも頭を下につけた眞理であつた。どんな人でも人の注意を引くほどに私のことに對して頭に釘を打ち込まうとするならば、全ての「價値を轉換」する以外には何一つをも必要とはしないのである。それ故私は更に說明しようとはするのだ。結局どんなものでも事象（書物を含んだ）といふものからは、自分が自分に知つてゐるものより以上なものを知ることは出來ない。經驗によつてどんな接觸もないものには、人は聽く耳を持たないものである。一番極端な場合、卽ち普通の經驗は無論、非常に稀な經驗であらうとも、到底達することの出來ない事實ばかりについて、一つの書物が物語る――それが新しい經驗の連續を示す最初の言葉である、といふ一つの極端な場合を考へて見る。かういふ場合には全然どんなものさへも聽くことは出來ない。しかも又、どんなものも聞えないところには、どんなものゝ存在もないのだ、

と言つた錯覺を伴ふものである……。つゞまりさういふことは私の通例の經驗で、若しさう言つた方がいゝなら、それは私獨特の經驗だと言つていゝのだ。私のうちの何かをその人自身の想像――例へば私とは反對の「理想主義」であることも屢々だ――を土臺として拵へ上げたのである。私のうちの何物をも理解しなかつた人は、私の全てを見るに足るといふことを拒んだのである。「近代」人とか「善」人とか基督教徒とかその他虛無主義者とかの反對に、この上ない本然的な體型を示すところの「超人」といふ言語――道德の破壞者ツアラツストラのやうな人間が語ればその意味深重となるその言葉――は、どこでも〳〵どんな交渉さへなくて、ツアラツストラの風貌に現はれたのとはまるで反對な意味にとられてゐる。半「聖人」で半「天才」で、さうして高級な人間の「理想的」體型だと言ふのである。又その他學問のある馬鹿者たちは、私をダアヴィン主義ではないだらうかとも疑つたのであつた。甚しいものは、決心と意志とに反して大嘘つきとなつたカアライルの「英雄崇拜」――私が激しくどこまでも排斥した――ま

でをも私の說の中に見出すものさへあつたのである。或る人に向つて、バルシファル Parsifal〔「アアサア王物語」の中の勇士—譯者〕よりもツエザアレ・ボルギア Cesare Borgia〔羅馬法王アレクサンダア六世の子で、模範的な政治家と認められてゐた—譯者〕の方が必要であると言ふと、その人は耳を信じなかつた。諸君は私が自分の著書類への批評、わけても新聞に掲げられた批評については、どんな好奇心も特たないことを許さなければならいであらう。私の友達や出版者はこのことを知つてゐて、私にはさうしたことは言はないのである。特殊な場合として、或る書物——それは「善惡の彼岸」——について、犯されたものをすつかり見たことがあつた。それを私は順しくお知らせしておかなければならいであらう。ナチョナル・ツアイツング——外國の讀者のために言つておくが、それはプロシアの新聞なのだ——一寸斷つておくが私自身はル・ジユウルナル・ヅ・デエバを讀むだけだ——が正氣でこの書物をば「時代の標示」して、さては本當のユンケル〔プロシアの勢力のある階級—譯者〕の哲學であるとか或は又クロイツエル・ツアツイング〔ユンケルの機關新聞—譯者〕にはこんな哲學を出すだけの勇氣が欠けてゐるだけだとか解することが出來たとは、果して本當とは思へるだらうか。

二

上に語つたことは獨逸人に向つて言はれたのであつた。私は獨逸以外の此處彼處に讀者を——本當に一粒選りの智識のある人たちや、信ずべき高尙な地位や職業に敎化された人たちを持つてゐるのである。私は讀者のうちに本當の天才をさへ持つてゐる。ヴインナで、セント、ペテルスブルクで、ストツタホルムで、コペンハアゲンで、パリイで、さうしてニユウ・ヨルクで——到るところで私は認められてゐるのだ。私はヨオロツパの凡士である獨逸では認められてゐない……。それから私はまた、私の書物を讀まない人たちや、私の名前も哲學といふ名前さへも一度も聞いたことがないやうな人たちをば、一層喜ぶものであるといふことを告白する。どんな處へ私が來ても例へばこのツウリンなどでも、どん

な人であらうと私の顏を見ると快活に平和になる。これまでに一等私の氣に入つたのは、呼賣のお婆さんがその持つてゐる葡萄の中から、私のために一番甘いのを探し出さないと安心しないことである。人間もこれほど哲學者でなければならない……。ポオランド人がスラヴ人中のフランス人だと言はれてゐるのも徒爾ではない。愛嬌のあるロシア女は、私が何人種かといふことを少しでも考への內に入れることなどはない。私は尊大な態度になるといふことには不得手だ。當惑の態度を出すくらゐが落である……。獨逸風に考へ獨逸風に感じる——私はどんなことでも出來るけれども、この一つ事だけには手を拱くものだ……。私の舊師のリツチユルは、私が言語學上の論文さへバリイの小說家のやうに——非常に刺戟的に構想すると言つた。バリイでさへも人々は「私の大膽と纖銳との全て」——テエン氏の言葉——にびつくりしてゐる。私はあの決して無味、卽ち獨逸風にはならないところの鹽であるエスプリが、デイオニソス讃歌の最高形式に至るまでも効いてゐることを信ずれば懼れるものだ。私にはそれより他には何とも仕樣がないのである。神よ救ひ玉へ、アーメン。——私たち全ては、いや、その或る者は經驗上からでさへ、耳長動物とはどんなものかといふことを知つてゐる。そこで私は私が一番小さい耳を持つてゐると主張するのだ。これは仲々女たちの興味を引く——女たちは私によつてよく解せられてゐると思つてゐるやうに思はれてならない。私は撰り拔きの反驢馬なのである、世界歷史上の怪物なのである——私は希臘語で、いや希臘語でばかりではなく反基督なのである。

三

或る程度まで私は私の文學者としての特權を認めるものである。一つ一つについて言ふと、私は私の著作を常に讀むがためにどんなにか激しく趣味を「破壞する」かといふことをよく知つてゐるのである。以後人々はその他の書物には耐えることが出來ない。哲學の書物には殊更耐えることが出來ない。この貴い微妙な世界に入るのは、類のない卓絕である。——これをしようと思へば、決して獨逸人であつてはならないのである。つまりそれ

に相當しないでは得られない卓絶なのだ。けれども意志の高いといふことで私と親しい人は、私の書物のうちに物事を究めるところの大きな喜びを知るのである。かつては一羽の鳥さへも飛んで行かなかつた高い處から、私は來たからだ。かつては一脚の足さへも迷ふて入れなかつた深い淵をば、私は知つてゐるからだ。私は或る人が私に向つて、私の書物を手から離すことは迚も出來ない——私は夜の睡眠さへ妨げるものだと言つたのを耳にした。誇りに富んでゐると共に隙のない書物はこれ以上にはない。——私の書物は應々この世にあつて達することの出來る最高なものであるシニズムに達する。さうあらしめるためには、非常に强力な拳と同時に、非常に軟柔な指が必要なのである。內心の薄弱といふものは、例へば理解の不浸透などといふことさへも、かうした事柄と交渉を保つことを許さないのである。人間は神經を持つてはならない。人間は快い內心を持つてゐなければならない。內心の薄弱とか處々の不純物がかうしたことと交渉を保たせないのは無論のこと、卑屈だとか不正直だとか內心の復讐心などはわけてもさうである。私の一語はどんな良くない本

能をもあばき出すのだ、私には知巳のうちでたくさんの實驗用動物がある。私はこんな人たちから、私の著書に對しての非常に有益な多くの反應をば、つくづくと感じるのだ。私の書物の內容とはどんな交渉も保たないことを願つてゐる人たち、例へて言ふと私の所謂友達どもは、それに向つて「沒人格的」態度をとるものである。彼等は私が書物を著したといふことを祝福したり——或は又調子がより快明になつたから進步したのだなどと言ふのである。全然邪惡な「精神」や根本から嘘僞な「美しい魂」などは、この書物に向つては、その爲すべきところを知る由もない。——こいふやうな譯だから、彼等は私の著作をば、「美しい魂」で動きの取れないほどになつてゐる彼等自身以下のものと見るのである。私の知人の中の馬鹿である凡々の獨逸人は（と失禮ながら言ふけれども）いつだつて私の考へてゐるところとは違つてゐるのだ。だが、同じい考だといふことを時々私にわからせようとする。かうしたことをば私は「ツアラツストラ」についてさへも耳にしたのであつた……。

次に、人間の否男性のどんな「女性主義」も、私に向つては門戶を閉すであらう。さうい

ふ風なことは、決して人間をば大膽な認識の究極へと導いては行かないであらう。人間は自分自身をば甘やかしてはならない。強い眞理の下にあつて快活玲瓏であらうとするならば、人間は強くなる習慣をつけなければならない。私は完全な讀者の姿をば、いつも勇氣や好奇の心に充ちた、さうして幾分柔軟で悪賢い用心堅固な異物で、生れついての冒險家發見家だといふ風に想像してゐるのである。どんな人だけに向つてツアラツストラがその謎を物語らうとするかといふことについて私は結局、それの物語つた言葉より以上に、本當にどんな人だけに向つて物語るか、といふことをば言ひ表すことは出來ないことなのである。

君たちに、勇ましい探險家に、訊問家に、さうして謀計の帆かけて恐ろしい
海の彼方に乗り入る人たちに——
君たちに、魂はいつも笛を手にしつゝ深淵の彼方に誘はれて、謎に醉ふ人たち
に、薄ら用りを喜ぶ人たちに
——さうだ、君たちは怯懦る手で一すじの糸を探さうとはしないから。しかも君たちの忖度し得るところ、君たちは推理することを憎むから——

四

同時に私は文體技巧といふことについて一般的に言つておきたい。記號（その調子を含む）によつて情熱の狀態やその內面的の緊張を傳へる——といふことが全ての文體の意義である。しかも私にあつては內部の「多面」がとりわけ多いといふことを考へると、私には凡そ書くことが出來る文體といふ文體のうちで——人々がこれまで扱つた全ての文體技巧のうちで、一番多面的なものであると思はれるのである。如實に內部狀態を傳へ、また記號について、その調子について、即ち表現法——全ての句讀の法則は表現法である——について誤りのないものは、皆いゝ文體である。この點について私の本能に誤りはない。

――文體として美しいなどといふことは「美それ自身」とか「善それ自身」とかといふやうに全くの愚であるか、それとも只の「理想主義」である。聽く耳があるといふこと――同じやうに情熱を惹き起し、また同じやうに情熱に價する人たちがあるといふこと、自分といふものを傳へるべき人々がないことはないといふこと、それらは今もまだ依然前提とされてゐるのである――例へて言ふとツアラストラは或る期間のうちはさうした人たちを求めるのだ――あゝ、だがそれはもつと長い期間求めなければならないことだらう――それを聽くにはそれに價しなければならない。しかもその時が來るまでは、この書物のうちに用ひられ〳〵た技巧をば、わかつてくれるものは一人としてもないことだらう。もつとこれよりも新しい、そしてかつてその試しもないやうな、そのためにとて造られた技巧の方法を用ひた人はなかつた。さうしたことが獨逸語で爲し終へたといふことは、今尙その證明の入用なことである。それが以前なら私も、强くそれを排斥したに違ひない。私に向つては獨逸語によつて何を語ることが出來るといふのだ――一體人が言葉によつて何を語ることが出來るかといふことを知つてゐるものはない。私は初めて、崇高く超人的な情熱の、始終を現す偉大なリズムの技巧と偉大な句讀の形體とを發見したのもであつた。私は「ツアラツストラ」第三篇の最後である「七つの封印」と題されだデイオニソス讃歌によつてかつて詩と名づけられたものからは、遙かの彼方に跳躍したのである。

五

恐らく私のよい讀者は――私が持つに相當してゐるやうな讀者は、昔の偉大な言語學者がホラアツを讀むやうに私を讀む讀者は、私の著作のうちに異常な心理觀察の言葉のあることをば初めて見出すであらう。全ての世界はその根本が一つであると說くところの種々の命題は――通俗的な哲學者や道德家やへつぽこ學者はいざ知らず――私には明らかに誤りだと思はれる。例へて言ふと「自己棄却」といふものと「自己」といふものとが對立であつたり、それともに自己そのものが只一つの「高尙な欺瞞」や只一つの「理想」であ

るやうなことがさうである。自己的な行とか自己棄却的の行とか、そんなものが實際にある筈はないのである。二つの概念は心理的の矛盾である。それから「人間は幸福を得ようがために努力する」といふ命題も。或は「幸福は道德の應報である」といふ命題も。又は「快と不快とは對立する」といふ命題も。人類をば豚にする道德といふものは、心理的存在物の全てをばその根本から嘘僞化道德化して、やがては愛といふものは「自己棄却的な」ものでなければならないといふ恐ろしい無意義とはなつた。人は自分の上に強く根を下さなければならない。兩足の上に勇ましく立たなければならない。さうでない以上は到底愛することは出來ないのである。女性は既にこのことを知りつくしてゐる。彼女たちは自己棄却的で客觀的な男性といふものを物の數ともしない。序に私は女性といふものを知つてゐるのだといふ推測をして見ようか。これは私のデイオニソス的性格に基く賜なのである。永遠の女性への一番初めの心理觀察者は私である、といふことを何人が知つてゐるだらうか。彼女たちの全ては私を愛する——過去の話ではあるけれども。尤も、呪はれた婦人たち、即ち子供を生む能力の缺けてしまつた「解放された女性」は除いてである。——幸にも私は私自身をば、づだ〳〵に千切らうとは思はない。完全な女性は、愛するとづだ〳〵に人を千切つてしまふものである。私はかうした愛すべき氣まぐれな女をば知つてゐる……。あゝ、地下に葡ひ廻つてゐる小さな肉食動物の、何といふ危つかしいことであらう。しかも又極めて愉快なそれは……。復讐を追ひ求める一小婦は、運命それ自身をも覆すであらう。——女性といふものは言ひつくせぬくらゐ男性よりも惡賢いものである。女性で如才のないといふのは、既に墮落の狀態である——全ての所謂「美しい魂」には、その根本に生理的の缺陷がある——といふとメヂチニツシュ（獨逸語でメヂチニツシュ medicinisch といふと醫學的だが、それを又半露骨に通じさせたものである譯者）になつてしまふからこの邊で止さう。同權を求めるがための鬪爭は、病氣の徵候だと言はなければならない。醫師は大抵このことを知つてゐる。——一體に女性といふものは、女性であればあるだけ、全ての權力といふものに向つて深く反抗するものである。兩性間の永遠の鬪爭といふ自然の現

象は、女性にとつては似もつかない地位を與へる。——諸君は性愛についての私の定義に耳を貸してくれるか。それは如何にも哲學者らしい獨特の定義なのだ。性愛といふものはその手段としては闘爭であつて、その根本としては兩性の命を堵しての憎惡なのである。どうすれば女性を癒やすことが出來るだらうか——「救ふ」ことが出來るだらうか、といふ問題についての私の回答を聽いたことがあるか。女性には子供を與へよ。女性には子供といふものが必要なのである。男性はいつも只手段に過ぎないものである、とツアラツストラは言つた。——「女性の解放」——それは片輪の女性の本能的な憎惡である。生殖不能の女性が完全な肉體を持つてゐる女性に對しての憎惡なのである。男性に向つての闘爭は、いつも只手段と口實と戰術とに過ぎないのである。彼女たちは「女性それ自身」として「高級な女性」として女性中の「理想論者」として彼女たち自身を向上させるつもりでゐながら、却つて一般女性の水準をば低下させるものである。解放された女性とは、根本から「永遠の女性」世界での虚無論者で、復讐の本能をその根低に持つたところの不具者のことである。……一番性の悪い「理想主義」——それはまた男性の側にもある。……例へば模範的老嬢ヘンリツク・イブセン流の全ては、人間の純粋な精神と兩性愛の性質とを毒することがその目的なのである……。そこでかういふことに對しては意地惡であつて、しかも正直な私の異見に、少しでもその疑ひをば殘さないやうに、今私は自分の道德經の中の惡德に反對してゐる條文を示しておかう。私は惡德といふ言葉によつて、自然に反くすべてのもの、奇麗な言葉の方がお氣に入るなら、理想主義をば攻擊するものである。即ち下に掲げたやうである。「貞操の教は、公然とした自然背理の督勵である。性的生活に對するあらゆる輕蔑、「不潔」といふ概念でそれを不潔にするのは、人生に對する罪惡それ自身である——人間の聖靈に向つての本當の罪惡である」——

六

私が心理觀察者であるといふ概念を與へるために、「善惡の彼岸」に現はれた奇妙な心理

觀察の一つをお目にかけよう――だが私は、この一節が誰のことを書いてあるのかといふことについてはどんな詮議立をも許さないものである。「あの偉い仙人のやうな心を持つてゐる天才である。神様のやうな誘惑者であつて、生れながらに意汲々とした良心主義者である。全ての魂の奥底まで浸つて行くことの出來る音聲を持つた人である。一言たりとも一目たりとも、魅惑といふことを考へや心の中に置いてないやうなことをば、用ひない人である。さうして印象法が巧い――だが自分がどういふ風に見えるか、といつたやうなそれではなくて、彼に隨き從つてゐる人々を、更に〳〵近づかせるやうな、更に〳〵內心から衷心から從はさせるにこの上ない壓迫者、と見えるやうな印象法の理解に、非常に巧妙な人である……。心の天才、さうして全ての聲高い人たちや、さては自ら得意な人たちを沈默させ、更にまた耳を傾けることをば敎へるのである。しかもそれは粗つぽい魂を滑かにして、その人たちへ新しい渴望を――その人たちの上に深い大空が姿を映してゐるのに似て、鏡のやうに靜かに橫はつてゐたいものだといふ渴望を與へるのである……。心の天才、さうして無骨な性急な手に蠢くことと、それをより優しく握ることを敎へるのである。それは姿もなく忘られ果てた寶物、美や苦い精神の雫をば、厚く仄暗い氷の下に見出して、洞の中に長い間、泥と砂とに埋もれてゐた黃金の玉を招く魔杖である……。心の天才、さうしてそれに觸れて全ての人々は豐かになつて去つて行くのである。惠まれもせず征服もされずに他人の善に幸され强壓されるやうなこともなく、その人自身が當んで、より新しくその手で拓き、さはやかな風に音立てながら、更にまた朧氣に柔く脆く打ち碎かれて、また更に名を持たない願ひに充ち、新しい意志と流れとに充ち、しかも新しい不滿と逆流とに充ちることとなるのである」

悲劇の發生

一

「悲劇の發生」を正しく理解しようとするならば、二三の事柄を忘れなければならないであらう。それはその誤謬のためにーーワアクナア主義といふものがまるで生長の表示でもあるかのやうに、この書物をばワアクナア主義に適用したために、人々を動かしもしたり、又迷はしもしたりしたことである。實にかうした譯から、この書物はワアクナアの生涯での一事件となつたのであつた。それ以來ワアクナアといふ名前に向つて、初めて大きな希望を抱かれるやうになつた。ワアクナア運動の文化的價値といふものに對しても時には「バルシアル」の戯曲の中にも世間一般が高く評價するやうになつたのは、私に大きな責任があるとより外には思へないのである。ーーー私は度々この書物が、「音樂精神」より來たる悲劇の再生」として引用されてゐるのを見た。人々はワアクナアの藝術と作意とその任務をば、只新形式の表現としてのみ聽いたのであつたーーかうしてこの書物が、どれ

だけの價値のあるものを含んでゐるかといふことは聽き逃してしまつたのである。どうして希臘人が厭世主義をば取扱つたか――何によつてそれを征服したか――といふことについての最初の教示としては、「希臘主義と厭世主義」と言つた方が、どれだけかはつきりした名稱であつたであらう。實は悲劇さそは、希臘人が厭世家ではなかつたといふ證據なのである。ショウペンハウエルが全てのものに誤りをしたやうに、ここにも亦誤りをした。公平な見方をするならば、「悲劇の發生」こそはまことに非時代的に見える。ヴェルトの驕しい戰爭の響の内に始められたとは夢にも思へないことであらう。私はこの問題をばメツツの城壁の前に、冷やかな九月の夜に、さては又病兵看護の任務のうちに、その考想を廻らしたのであつた。人々は寧ろこの書物が出るには、五十年は早いと信ずるであらう。この書物は政治上には拘泥しない――現在では「非獨逸的」だと言はれるであらう――この書物にはヘエゲルの臭ひがぷん〳〵としてゐるけれども、二つ三つの言葉だけは、ショウペンハウエルの持つてゐる強い死人の臭ひが感染つてゐる。一つの「觀念」が――デイオニ

ソス型とアポロ型との對立――が形而上學的に再現されてゐる。歴史それ自身はこの觀念の進展であつて、悲劇にあつてはその反面が抑揚されて一體となるのである。かういふ見方から、これまでには相反してゐた二つの物が、急に相對し相照らされ、さうして相理解されるのである……。例へば歌劇と革命などはそれだ……。この書物の特に新らしい二つの點は、第一に希臘人にあつてのデイオニソス的現象の闡明。それは初めてこの現象に心理的説明を與へるものである。この現象に於て、全ての希臘藝術の基調を現すものである。――第二にソクラテス主義の闡明。初めてソクラテスは、希臘滅亡の機緣として、或は又典型的のデカタンとして認められたのである。本能は對する「理性」。危險な、生を埋める力としての「理性」。さうして全篇の悉くは基督教に向つては、深い敵意のある沈默である。基督教といふものは、アポロ風でもなければデイオニソス風でもないのである。全ての美的價値、「悲劇の發生」が認める只一つの價値をば、否定するものである。デイオニソス的の象徴にあつては、肯定といふものが何處までも遠せられてゐるのにも拘らず、基督教

は何處までも虚無的である。この書物の中には一箇所だけ、基督敎の僧侶のことをば「不信の侏儒」「地下動物」として擧げたところがある。

二

この出發點は甚だ注目に價する。私は自分の一等深い經驗と一致する姿を、具象を、只一つ歷史のうちに見出したのであつた――第一に私はこれによつて、驚くべきディニオソス的現象を知つた。それと共に私は、私がソクラテスをば一個のデカタンであると認めたがために、道德についての個人的好惡から、私の確實な心理的把握に破綻を來すやうなことはまるでない、といふ確實な證明を與へられたのであつた。――道德そのものをば、頽廢の表象として認めるのは新しい見方である。知識史上最高無二のことである。私は前述の二つによつて、樂天主義對厭世主義と言つたやうな哀れな馬鹿のお喋りからは、どんなに高く飛び離れたことだらう。――私は眞實の對立――地に隱れた復讐心によつて、人生に刄を向けようとする墮落した本能（――基督敎だとかショウペンハウエルの哲學だとか、或る意味ではプラトオの哲學だとか、又典型的な理想主義だとか）とさうして過剩によつて生れた最高形式の肯定、卽ち苦しみそれ自身だとか罪惡それ自身だとか、さう言つた人生にあつての一切の懷疑的な、親し味薄いものに對する無遠慮な肯定となつたのである。この人生に向つての最後である喜ばしい豐饒な大膽な肯定こそは、この上ない識見であるばかりではなく、眞理と知識とによつて極嚴に確められ眞面目に保たれた最も深い識見なのである。存在してゐるものは只一つでさへも滅すべきものではない、只一つでさへも缺くべきものではない――基督敎徒やその他の虚無主義者から排斥されたところの生存は、デカタンスの本能がそれを肯じ、或は又敢て肯じたそれよりも、價値階級に於ては無限に高いそこにさへある。これを理解しようと思へば勇氣が必要である。條件としては力の充實が必要である。何故かと言ふと、人間といふものはその勇氣の範圍に從つて進み、或は又その力の程度に從つて眞理に近づくものであるから。實在への認識と肯定とは、强

者にとつては必然的なものであつて、それは丁度弱者が感銘する實在への卑怯な回避――即ち「理想」などといふものと同じやうなことである。認識するといふことは彼等には出來ない相談である――デカタンは嘘僞が必要だ――それが彼等を保つところの條件である。只「デイオニソス的」といふ言語がわかるばかりではなく、「デイオニソス的」といふ言葉の中に自分自身を理解する人たちは、プラトオや基督教やショウペンハウエルなどに向つて反駁する必要は認めない――彼等にはもう腐爛の臭氣が漂つてゐるからである。

三

かういふ考から私が、どの程度まで「悲劇的」といふ概念を、又悲劇とは如何なるものであるかといふ究極の知識を發見したが。それについては最後に「偶像の黄昏」一三九頁で明かにしておいた。「一番親しみ薄い困難な問題の中に、しかも人生の肯定。一番高い人生の犠牲の裏面に、尊ばざる自己を喜び生きようとする意志――これを私はディオニソス的と呼んだ。これを私は悲劇詩人の心に至る橋梁と考へた。恐怖と同情から脱するがためではなく、激しい感動から自己を洗ひ淨めるがためでもない――アリストテレスはさういふ誤解もしたけれども。――恐怖と同情とを超へ、生そのものゝ永遠の喜び――破壞の喜びさへ伴つた喜びとなるがため……。」かういふ意味から私は、私自身をば最初の悲劇哲學者と認める權利を持つてゐるのである――それは言ふまでもなく厭世哲學者の一番極端な反抗であり反對者である。私の前にはデイオニソス的の現象をば哲學的情熱に置換するといふことはなかつたのであつた。悲劇についての知識はなかつたのである。――私はソクラテス以前二世紀の、希臘の偉い哲學者たちにさへも、この兆候を求めては無駄であつた。私は未だヘラクリツトに疑ひを抱いてゐる。この人に對してだけは、暖かい快い氣持を味ふのである。デイオニソス的哲學の疑ふべくもない特色であるところの、生滅に對する肯定や、反抗と闘爭との肯定や、或はまた「存在」の概念をさへ根本から排する生存――何は兎も角私はかういふ點について、曾て思惟したどんなものよりも交渉の多いといふこと

をば認めないではゐられないのである。「永遠輪廻」即ち無限無條件に反覆されるといふ萬物回歸說——ツアラツストラのこの說は、或は既にヘラクリツトによつて說かれたかも知れない。殆んどその全ての根本概念をばヘラクリツトから傳承したストアには、まるでそれらしい跡かたさへもないのである。

四

この書物には恐ろしい希望が物語られてゐるのである。音樂のデイオニソス的將來といふものに對する希望を消すやうな根據は、結局私には一つもないのである。今後一百年以後の時代に目を注いで、過去二千年間の自然背理と人類汚辱とを亡ぼさうとする計劃が、成就した場合を想像して見よう。全ての任務のうちで一番大きなもの、即ちあらゆる墮落した寄倉的人間への容赦もない絕滅と共に、人類の向上を圖る新しい人生の黨派は、デイオニソス的狀態が再生しないではゐられないやうな、生命の過剩を再びこの地上に可能ならしめるであらう。私は悲劇的時代の到來するといふことを誓ふものである。生命肯定にあつてのこの上ない藝術である悲劇は、人間の一番の難路であつて、必然的な鬪爭意識といふものをばその背後に背つて、しかもそのために苦しむことのない時代に再生するであらう。私がその青年時代にワアクナアの音樂から聽いたものは、ワアクナアとはどんな交涉もなかつたといふことや、または私がデイオニソス的音樂を說べた時にこそ、私が聽いたところのそれを書いたといふことや、さては又全てのものに對して私が本能的にそれを私の內部なる新精神に移植し變形しないでは居られなかつたといふことなどを、私は言ひ足しておいてもいゝだらう。それについての證據としては（それが證據であればこそ自信を以て言ふのではあるけれども）私の「バイロイトに於けるワアクナア」Wagner in Bayreuth である。心理上に著しい點を言へば、そこに說べてあるものは全て私自身のことばかりなのである——若しも本文にワアクナアといふ名前が出たならば、遠慮なくそれに私の名前か、それとも「ツアラツストラ」の名前を置いてよろしい。デイオニソス讃歌的藝術家の

姿は、それ以前にあつた「ツアラツストラ」の作者の姿なのであつて、しかも事實上のワアクナアにはほの少しさへ觸れないで、深く描かれてゐるのである。それについてワアクナア自身には一つの思惑があつた。彼はこの文章に彼自身をば認めなかつたのであつた。――と同じやうに「バイロイトの思想」 der Gedanke von Bayreuth が、「ツアラツストラ」を解するほどの人にはどんな疑ひでもない一つの物に、即ち超え優れた人々が全ての任務のうちの一番大きなものに身を捧げる偉大な光明に變化したこいふことをば誰が知つてゐるだらうか。これは私が今後知らなければならない出來事なのである……。最初幾頁かの情熱は世界史的なものである。第七章に述べられたものは、ツアラツストラの本當の見方である。ワアクナアやバイロイトや、小さな獨逸の哀れな全てのものは、遠い未來の蜃氣樓が映す一片の雲の姿である。私自身の著しく特異な性格は、心理的に言つてさへもワアクナアのそれに移入されてゐる――その光に輝いてしかも宿命的なさまざまの力や、かつてはどんな人にもなかつた力を得ようこする意志や、精神的な事柄に向つては臆するここ

Gedenke von Bayr

ろもない勇氣や、さては又その行はうこの意志を壓迫することもない深い學知の力など。この書物の全ては豫言的である。その第三十頁に「悲劇的氣分」の概觀を說いた世界的な調子を聽きたまへ。この書物のうちにあるものは全て出史的な調子である。これこそは世にあつての一番稀な「客觀性」なのである。私の本質についての絕對的な確信は、どんな實在に向つても思ふがまゝに逆り出された。私についての眞理は、驚くべき深い處から言葉を出されたのであつた。その七十一頁には、先んじて「ツアラツストラ」の文體が、銳、くはつきりこ記用されてゐる。しかもさうしてツアラツストラの事件、人類を高め淨める驚くべき行爲をば、無邊に表現した文章は、その四十三頁以降四頁のほかには決して見出すことの出來ないものであらう。

非時代思想

一

「非時代思想」四篇は全て戰鬪的である。これ等は私が只の夢想家ではないといふことや、さては又私が劍を拔くことを喜ぶものであるといふこと――しかも恐らくは私の手首の危險な程に自由自在であることをば證明してゐるのである。第一回の攻擊は（一八七三年）その當時私が憚るところのない侮蔑の眼で見下してゐた獨逸の文化に向けられたのであつた。何等の意義もなく何等の實質もなく、また何等の目標もなく、只そこには「輿論」ばかりがあるだけである。獨逸人民の大きな軍事的成功が、この文化に向つて好都合な何物かを齎した――否、甚しくは、フランスに對してこの文化が勝利を證明したと信じる以上に救はれない誤解はない。第二の「非時代思想」（一八七四年）は科學的經營の方法についての危險な點、卽ち生命を迫害するものをば明かにしてゐる。――この人類を傷ける器機機關のために、勞働者の「無人格」のために、或は又「分業」といふ似非經濟のため

に、病みつゝある生活をば明かにしてゐる。手段としての近代科學的經營は、その目的である文化をば野蠻にしつゝある……。この世紀の誇りとしてゐる「歴史的感覺」が、初めてこの論文では病弊として、或は頽廢的表示として認められたのであつた。——第三と第四の「非時代思想」ではより高い「文化」の概念と、さうして「文化」の概念の挽回を明示するがために、一番激しい自利や自己訓練の二つをば指示されたのであつた。その二つを繞る「帝國」「文化」「基督教」「ビスマルク」「成功」などと言はれるものに向つて、帝王のやうな侮蔑に溢れた、わけても非時代的な姿が——即ちショウペンハウエルにワアクナア、否一口に言へばニイチェが……。

二

この四つの攻撃の中で、第一は大變な結果となつた。全ての意味でその誘き出した騒きは見事なものであつた。私は戰勝國民の痛いところに——彼等の勝利が文化的なそれでは

なくして、徹頭徹尾そのほかの或るものだ、といふ痛いところに觸れたのである。その回答はいろいろの方面から來た。しかもそれは只に私が、獨逸の教養のある俗物、或は獨りよがりのお手本として嘲笑した、短く言ふと「新舊信仰」といふ酒屋の腰かけで說かれるやうな福音の作者として嘲笑したダヴイツト・シユトラウスの舊友どもから來たばかりではなかつたのであつた。(——私が書物を出してから教養のある俗物といふ言葉が、國語のうちに在在するやうになつたのである)。私が彼等の奇物シユトラウスをば道化役者と認めたので、ウエルテンベルヒ人とシユワビア人である舊友どもは深くその誇りを傷けられ、丁度私の願つたり叶つたり、まんまと手荒い答をしたのであつた。プロシヤ人の反駁はもつと悧巧であつた。そこにはもつと「伯林的色彩」が含まれてゐた。一番下品な態度をとつたのは、ライプチヒの新聞、あの評判の惡い「グレンツボオテン」であつた。それに大變憤慨して訴訟しようとしたバアゼルの友人を、なだめるのに實に骨が折れた。無條件につばりと私の味方となつたのは、只二三人の老年の人たちばかりであつた。それは複雜な、

或る點では不可解な動機からであつた。就中ゲツチンゲンのエワルト Ewald は、私の攻撃がシュトラウスには致命的な結果となつた、といふことを闡明したのであつた。さうしてもう一人、それ以來私の有數の讀者となつたところの、古いヘエゲル學派のブルノオ・バウエル Bruno Bauer といふ人がある。彼はその晩年となつて、好んで私をば引合に出したのであつた。例へばプロシヤの史料編纂者のフォン・トライチケ von Treitchke に向つて、その人の不理解であつた「文化」といふものゝ概念について、一體どんな人にその教へを乞へばいゝかといふ暗示を與へるがために引合に出したのであつた。この書物とその著者についての一番眞面目な一番長い批評は、哲學者フォン・バアテル von Baader の古い弟子であるウエルツブルヒの教授ホフマン Hoffmann によつて說べられたのである。彼はこの書物によつて、私にとつては一つの大きな運命——無神論の問題にあつての一つの轉機とその大きな進路を導いて來るといふ運命をば見て取つたのであつた。さうして私をば無神論にあつての一番本能的な一番大膽な體型だと推奬したのである。私をショウペンハウエルに導いたのは無神論であつた。——しかも更に注目的で一番手きびく思つたのはカルル・ヒレブラント Karl Hillebrand の激しい大膽な同意で、その人は大抵の場合にはまことに溫厚な、凡そ筆を驅使する道を辨へてゐる獨逸人中最後の人間的な人物である。その文章は「アウスブルゲル・ツアイツング」の誌上に揭げられたのであつた。それは今では少しく愼重な形となつて、彼の全集中に修められてゐる。そこで私の書物が、一事件として轉機點として最初の自覺として最高の表示として、或は又精神的な事柄についての獨逸人の眞實とその情熱の本當の再臨として說べられたのである。ヒレブラントはこの書物の形式に向つて、またその完成した氣品に向つて、更にまたその人間と事件とを隙なく區別する手際に向つて、非常に高い敬意を拂つたのであつた。彼はこの書物に對して獨逸語で成された最も優れた論戰の書（獨逸人にとつては危險至極で又勸めてはならない論戰の術の中で）といふ烙印を捺した。彼は獨逸にあつての言語の墮落について、私の力說をば無條件に同意しで、しかも更に私の所說をば一層力あらしめ（——現在獨逸人はブウ

リステン（言語國粹黨。純粹の自國語ばかりを尊重して他國語を排斥する一派の名稱――譯者）となつて、文章などは一つだつて書けはしない）さうして彼はこの國の「一流文士」に向つても同じやうな侮蔑を抱いて、やがては私の勇氣――「國民の寵兒をば法廷に拉して來る思ひ切つた勇氣」――に對する讃嘆を表したのであつた……。この書物がその後に與へた影響は、私の生涯では實にこの上なく貴いものである。それからといふもの私に向つて、喧嘩を賣る人間は一人もなかつた。誰もが默々としてゐる。獨逸の國では私をば氣味の惡い程警戒する。私はこの何年かの間、現在ではどんな人々も（特に「帝國」ではそれが甚しいが）十分主張することが出來なかつた言論の絕對的自由を主張して來たのである。私の天國は「わが劍の影」にある……。實に私はスタンダアルの格言の一つをば實行したのであつた。彼は社會に入るには決鬪を以てせよと勸めたのである。さうして私はどんなに私の敵をば選んだことか。どんなに獨逸第一流の自由精神をば選んだことか……。本當に新しい精神といふものは、初めてこれによつて表はれるやうになつたのである。これまで私

私にとつては、ヨオロツパとアメリカの「自由思想家」ほど、親しみ薄く緣遠いものはなかつた。到底救ふことの出來ない平々凡々の、「近代思想」の道化役である彼等に向つて、私はその人たちのどんな敵よりも、もつと〳〵深い反抗の有樣にあることをさへ認めるものである。その人たちはその人たちの流儀から、その思想通りに人類を改造しようとしてゐる。若しもその人たちが、私の立場や私の希望をば理解したならば、恐らくは遺恨骨髓に徹した戰を開くであらう――その人たちは揃ひも揃つて今尙「理想」を信じてゐるのである……。私は先づ最初の非道德者なのである。

三

ショウペンハウエルとワアクナアとを主題とした「非時代思想」は、只この二人についての解釋や二人についての心理的問題を提供するだけの役目をしてゐるのだとは、主張したくはない――勿論一つ一つについては別である。例へて言ふと、ワアクナアの性質の要素

は俳優としての天賦であつて、彼の手段や意企は只この天賦をば延長したのに過ぎないのだ、といふことはこゝにもはつきりと本能的に示しておいた。實はこの文章によつて、私は全然心理觀察とは別なことをするつもりだつたのである。――言ふまでもなく私は、類のない文化問題、強い自己訓練と自己防衛とについての新しい概念、出史的任務への道を初めてこゝに書き現さうとしたのであつた。大ざつぱに言ふならば、私は一つのことをば發表しようとして、或は又二三の組立や表象や表現方法をば得ようとして、ちやうど人々が機會をばその前髪で捕へるやうに、名を成しながら今尙見極められたことのない此二人の姿をば私の手で捕へたのであつた。だがこのことは極めて賢明な態度で以て、第三「非時代思想」の九十三頁に暗示されてはゐる。それと同じやうに、プラトオはプラトオの表象としてソクラテスを利用したのである。――今幾分の距離を隔てゝ、その當時の事情(その文章が表現してゐるところの)を振り返つて見ると、これ等の文章が只私を物語つてゐるだけである、といふことをば否定したくはない。「バイロイトに於けるワアクナアーとい

ふ文章は、私の未來の幻影である。又一方、「教育家としてのショウペンハウエル」では、私の內面的歷史と私の過程とが誌されてゐるのである。だが私は何はともあれ、先づ第一に誓言した!……私の現在に見えてゐるものに向つて、私の現在立つてゐる位置に向つて――もう言葉では告げずに、電光によつて物語るほどの高い位置――おゝ、その當時の私は、こゝからどれほどの遠くに離れてゐたことか!――だが私はその鄕を見たのだ。――たとへ私はほんの瞬く間でさへも、路と海路と危機と――さうして成功に向つては私自身をば僞らなかつたのである。この大きな誓言のうちなる平靜。只の誓言だけには止つてゐないところの、その未來を見わたすこのうれしい眺望。――全ての言葉がこゝでは體驗のそれである。深い內部のそれである。とは言へ、苦しい言葉のないことはない。そこにはまことに血潮の滴る言葉もあるのだ。けれども大きな自由の風はすべてのものゝ上に吹く傷みはそれの妨げとはならない。――哲學者といふものは、その面前の全てのものが皆恐ろしい爆發物である、といふやうに私が解するのはどういふ譯であらうか。アカデミイ的

の「反芻動物」とかその他の哲學の先生たちはいざ知らず、カントのやうな人でさへも、私は自分の「哲學者」といふ概念のうちに入れるには、尙數里の距離があるといふのはどうした譯であらうか。こゝにこの論文が、「教育家としてのショウペンハウエル」をば物語るものではなくして、事實はその反對の「教育家としてのニイチエ」をば物語つてゐるものである、といふことさへ許すならば、それは非常に價値のある教訓を與へるものである。その當時私の仕事が學者的のそれであつたことや、また或は私がその仕事を理解してゐたといふことをば眼中に置くならば、この論文の中に現れて來る難解な學者的な心理學にも意義のないことはないのである。それは一つの距離感情を現すもので、さうして任務とは何であるか、單なる手段とは何であるか、中間行爲とは何であるかといふことについて私がはつきりとしてゐたことを示してゐるのである。一に到達しようとして多であり、或は多くの處にあつたといふのは私の知慮なのである。或る一時的な期間中、私は教育家ともならなければならなかつたのであつた。

人間的な、餘りに人間的な

一

「人間的な、餘りに人間的な」は轉機の記念物である。それは諸々の自由精神のための書物と呼ばれるものである。その中にある殆んど全ての文章は、各々勝利を表明してゐる。——私はこの書物によつて、私の性格と合致しないものから脱した。「理想主義」は私の性格とは合致しないものである。この書物の題名は「諸君が理想的なものと見るところに私は見るのだ——人間的なものを、あゝ餘りにも人間的なものを」といふのである……。私は人間といふものをば一層よく知つてゐるのだ……。「自由精神」といふ言葉も、こゝではかうした意味、即ち自分自身といふものをばもう一度しつかりと保有して自由となつた精神、といふ意味より以外には解釋されることをば好まないものである。その調子や音響はすつかり變つたものである。人々はこの書物に知慮があつて冷靜で、時には苛酷で嘲笑的なのを見るであらう。高い氣品を持つてゐる一つの精神は、その素地にあるところのより

情熱的な流れに面を反けながら、常に支配の地位を保つてゐるやうには思れる。謂はばこの書物が早くも一八七八年に出版された所以が、ヴオルテエルの百年祭だといふことは、その點に有意義なのである。何故かと言ふとヴオルテエルは彼の後に書いた全ての人々に反對して、何を措いても精神上の貴族であつたからである。これについては私もやつぱり同じである。――私の書物にヴオルテエルの名前が出たのは、私にとつては確かに一つの進歩であつた……。このやうに若し人々が詳密に目を配るならば、そこには理想といふものが住み慣れた――その牢獄として或は又その最後の安全な隱れ家として住み慣れたところを、無常にもすつかり知りつくしてしまふのである。しかもほんの「閃く」光さへもない暗黑をば切り開いて行く明るい炬火が手にされて、この理想の闇路の中までをも照し出すのである。それは戰鬪である。だか火樂も煙硝もなく、戰鬪的の態度もなく、情熱もなく、さては又碎かれた四股さへもない戰鬪である――上に言つたやうなものは、どれも皆それ自身は依然とした「理想主義」である。誤りは次から次へと氷の上に放たれる。理想はそこから逃れることは出來ない。――それは氷結してしまふのである……。例へばこゝでは「天才」などは氷結してしまふ。一つの厚い氷の柱には「英雄」が氷結してゐる。もう一つ向方の一隅には「聖徒」が氷結してゐる。最後に「信仰」が、所謂「確信」が、さうして「同情」も亦激しく氷つてしまふ――彼方にも此方にも「物自體」が氷結してしまふのである……。

二

この書物を書き出したのは、バイロイトでの一番初めての演劇季節の週間である。この地で私を繞つた全てのものに對しての深い特異な感情が、この書物の前提となつてゐるのである。もうその頃となつて私の生活にどんなものが訪れて行つたか、といふ概念を持つ人は、或る一日バイロイトで私は目を醒した時に、私かどんな心持にあつたか、といふことをば推察することが出來る。まるで私は夢みる人のやうであつた……。一體私はどこに

居たのであらうか。私はどんなものをも認識しなかつたのである。私はまるつきりワアクナアをば認めなかつたのである。私は徒らに追憶の頁そば繙いてゐた。トリブシエン――遙かに離れた幸福の島。それに似た影さへない。そこに何事が起つたのか。――ワアクナアは獨逸に移植されたのであつた！ワアクナア主義者がワアクナアの主(ぬし)とはなつたのである！――獨逸の藝術！獨逸の教師！獨逸の麥酒！……どのやうな敏感な藝術家にだけ、またどのやうな趣味の世界主義に向つてだけ、ワアクナアの藝術が訴へるものであらうかといふことをば餘りにも知りつくしてゐる私たち餘人にとつては、獨逸の「諸道德」に蔽はれたワアクナアを見て、もうすつかり精を落してしまつたのである。私はワアクナア主義者については知りつくしてゐると考へられる。ワアクナアとヘエゲルとを混同した幸福なブレンデルから、ワアクナアとその人たち自身とを混同した「バイロイテル・ブレツタア」紙の「理想主義者連」に至るまで、三つの時代をば「經驗」したのであつた。ワアクナアについての色々な告白をば、私は「美しい魂」から聽いたのである。若し價値ある言葉が一つだつてあつたなら王國をやらう！　全く身の毛もよだつやうな連中だ！　馬鹿と無意味とその外の何かがたつぷりした三拍子揃ひ！出來損ひといふ出來損ひは、何一つだつて缺けてはゐない。非猶太主義さへも決して缺けてはゐない。――可哀想なワアクナア。彼はどこへ落ちて行つたのだらう。せめて豚の中へ行つてくれたらよかつたのに！　だが獨逸人の中へ行つたのである！……いつか後の世への教訓として、生粋のバイロイト人をば詰物にしておいたがいゝだらう。否、酒精(スピリツト)に漬けた方いゝだらう。精神(スピリツト)がないからである――そして「帝國」建設の基礎となつた「精神(スピリツト)はこれでござい」と書きつけて……否、もう澤山。愛すべきバリイの婦人が私をば慰めようとしたのにも拘らず、私は全く突然にその季節の最中二三週間の旅行に立つたのであつた。只私は不幸な電報を打つてワアクナアに斷つた。私の憂鬱とさうして獨逸人輕蔑の氣持とは、深いボエマアワルトの森にかくれたクリングゼンブルンの地で、病のやうに私に巣を喰つた――さうしていつも私は手帳の中に文章を、恐らくは「人間的な、餘りに人間的な」のうちに今も見ることの出來る嚴しい心理

的の材料ばかりを、Die Pflugschar といふ名で認めたのであつた。

三

その時私に出來たのは、ワアクナアとの破綻といふやうなことではなかつた——私は自分の本能全てに迷ひを感じたのである。その一つの迷ひは、ワアクナアであらうと或は又バアゼルの教職であらうと、それは只その目標に過ぎないのであつた。私自身に對する耐へ難い感情が襲つて來たのである。これこそは私が、私自身に立ち歸つて考へなければならない絶好の機會だと思惟したのであつた。その瞬間、これまでの私にはどれくらゐたくさんの時間が浪費されたか——言語學者としての私すべてが、私の任務といふものにとつてはどんなに無用なもので、またどんなに一人よがりなものであるか、といふことが非常に明かとなつたのである。私はこの嘘の謙遜をば恥ぢた……。私のうちなる精神の修養がすつかりと停滯してゐた、また私が必要なものをば何一つとして學び加へなかつた、更に又塵にまみれた不秩序な學問のおかげで、愚かにもたくさんのことを忘れ去つた、私に伴きまとつてゐた十年の月日。古の韻文家をば注意して疑惑の眼を注ぎながら、一つ一つに是非を與へる——全く私はこんなにさへなつてゐたのであつた！——私はすつかりと痩せ衰へ、またすつかりと飢え渇いた自分をば憐愍の目で見た。全ての實在は私の知識のうちにすつかりと消え去つてしまつた。架空的なものは何の力もない——私は直接に燒きつくやうな渇きに捕へられたのであつた。其から後、私は生理學や醫學や自然學科のほかはどんなものをも研究しなかつたのであつた。私の天賦がそれを強ひた時、私は初めて本當の歴史的研究にも立ち歸つたのである。さうして私は初めてこの時、本能に反いて撰ばれた活動、即ち人々がとゞのつまりそこへ引かれて行く「仕事」といふものと——痲醉的な藝術——例へて言ふとワアクナアの藝術によつて寂莫とか飢餓の感情を痲痺させようとする必要との關係を考へて見た、私はより周倒な反省をして、多くの若い人々にとつては、同じやうな困難のあることを見出したのである。一つの自然背理は必ず第二の自然背理をば強制す

るものである。獨逸の國では、はつきりと言へば「獨逸本國」では、餘りにもたくさんな人々が時が來ない先に固定したがために、今度は脱れることが出來なくなつたその重荷の下で、だん〳〵こ衰弱を増すやうなことゝなるのである。かういふ人たちは阿片としてワアクナアをば渇仰する——彼等は自分を忘れる。ほんの刹邦自分から逃避する……。否、五時間或は六時間さへも！

四

私の本能は丁度その時、これ以上の讓歩や妥協や或は又自分の錯誤に反對して、激しくその方向をば決定したのであつた。さまざまな生活さへも、一番不都合な條件や病氣や貧困でさへも——その全ては無價値な「自己棄却」から見たなら、まだいゝ方だこ考へられた。最初私は自分の無知のおかげで、そしてその次には怠惰のおかげで、または謂ふところの「義務感情」のおかげで、長い間この自己棄却に喰つついてゐたのであつた。この時驚いても〳〵尚足らないほどに、私の父方からの惡い遺傳が——根本的に若死の宿命である遺傳が、丁度の好機會に助勢にやつて來たのである。病氣はだん〳〵こ私をば、この中から解放したのであつた。それは私のあらゆる破局、あらゆる强暴な咎むべき行爲から免れさしてくれた。この時私は只一つさへ人間の眞情をば失はなかつた。それどころか更にそのたくさんを附け加へた程であつた。更に又病氣は、私のさまざまの習慣をばすつかりこ更へてしまふ權利を與へたのである。それは私に忘却を命令したのであつた。それは私に向つて靜養こ、待望こ、忍耐こ、この必要をば示した——。だが上に說べたのは思惟についてのことである……。私はもう自分の眼の有樣だけで、全ての讀書、卽ち獨逸語で言ふところの言語學（フイロロヂイ）に向つて終を告げたのであつた。私は「書物」から解放された。何年かの間、私はそれ以上は何一つ讀むことはしなかつたのである——これこそはかつて私が自分自身に表した一番大きな恩惠なのであつた！——つまりそれに埋沒されたといふ譯で、しかも不斷に他人へ向つて耳を傾けなければならない（——乃ちこれを稱

して實に讀書と言ふのである！）そのために、沈默してゐた自己といふものが、控へ目にそして躊ひながら、次第々々に目ざめて來たのであつた。――さうして遂には、再び言葉を發し、したのである。私はその生涯のうちで、一番病氣のひどい時ばかり、或は又その一番苦しい時ばかり、數多い幸福を抱いたことこてもなかつたのである、この「私への復興」がどういふものであるかといふことを知らうとするには、只「黎明」か或は又「さまよへる者とその影」などを見ればいゝのである。この復興こそは、一番高い種類の快癒それ自身なのであつた。そのほかのものは只その結果に過きなかつたのである。――

五

「人間的な、餘りに人間的な。」私の前に訪れて來たあらゆる「高尚な詐僞」や「理想主義」や「美しい感情」や、さては又その他の女性的な性格に向つて、突然にも結末を告げさせたこの嚴しい自己訓練の記念品は、その大半をばソレントで書かれたのであつた。その終局が、その最終の纏りがついたのはバアゼルの冬で、ソレントでの事情とは似もつかない程惡い事情の下にあつた。本當はその頃バアゼルの大學の學生で私に私淑してゐたペエタア・ガアスト Peter Gast 君が、この書物に對する責任を負つてゐるのである。痛む頭を縛りながら私は彼はそれを筆記したり訂正したりした――本當は彼が事實上の筆者であつて、私は只著者なのであつた。やがて書物が上梓されて私の手許に着いた時――重病人の私は心からびつくりしたけれども――私は他の品物と一緒にして、バイロイトへ二冊送つたのであつた。同時に不思議な運命の計ひによつて、ワアクナアの「バルシファル本編」が、「彼の親友フリイドリッヒ・ニイチエへ　教會評議員リヒアルト・ワアクナア」との獻辭を添へた美しい書物が、私の手許へも送られて來た。この二つの書物の交叉――それは私にとつては、まるで惡い兆音を耳にしたやうに思はれたのであつた。ちやうどそれは劍の交叉したやうには響かなかつたであらうか……。二人が默つてゐたことを思ふと、やつぱり二人はさう感じてゐたのであらう。――その折「バイロイテル・ブレッタア」の初號が

出た。私はその時が、何に對して一番該當する時機であるかを知つたのである。――信じられないことだ！　ワアクナアが教徒になつたとは……。

六

その當時（一八七六年）私が私自身についてどういふ風に考へたか、又どんなに驚異的な確實さで、私の任務とさうしてその任務への出史的な要素をば把握したか、こいふことに關しては、この書物の全て、取り分けその中でも重用な一箇所が、それを證明してゐるのである。只生れついての狡さ加減から、こゝにも亦「私」こいふ一小語を隱しておいたのである。だが今度はショウペンハウエルやワアクナアではなくして、私の一友人である賢明なボオル・レイ Paul Rée 博士に對して出史的光榮を贈つたのであつた。――幸にも當人レイは、それによつて欺かれるがためには、餘りにも敏感な人ではあつたけれども。他の人たちはそれはど敏感ではなかつた。私の讀者中には賴もしくない人が居る。例へて言ふと、今言つた事柄からこの書物の全體をば Réalismus（實在論こいふ言葉をレイ主義に通じさせたのである――譯者）だと理解しなければならないこ信じてしまつて、いつも直ちにさうだと認める獨逸の代表的教授が居るのである。このことについては「道德體系」の序論を一讀してほしい。――レイの名前を借用したこころはこれである。即ち『道德的感情の起原について』といふ書物の編者であつて、一番大膽でしかも一番冷靜な思想家の一人（『最初の非道德家ニイチェ』を讀め）が、その鋭敏な英斷的な人間行爲の解剖によつて到達した命題こは何か。『道德的人間は動物的人間よりも可知世界に接近してゐるこいふことはない――何故こいふに可知世界こいふものが既に實在してゐないものだからだ……』こかういふのである。歴史的認識をば擊退するがために（『一切價値轉換』を讀め）强固こなり鋭敏こなつたこの命題は、恐らく一度はいつの日にかに――一八九〇年？――人類の「形而上學的必需」への根底に向つての斧の役目を果すものである――人類の幸福こなるかそれこも又呪咀となるか、そのどちらが勝利を占めるかといふことは誰が語れるだらうか。

だが何はともあれ、豊かであると共に恐ろしい、しかも全ての偉大な知識に備つてゐる二重の見方によつて世界を見るといふ、一番顯著な結果のある命題としてである……」

黎明

一　偏見としての道徳に關する思想

私が道徳に向つての攻撃は先づこの書物から始まつてゐる。この書物がほんの一寸でも火藥の臭ひを持つてゐるといふ譯ではない。――若しも人々がその鼻のうちに、幾らかの鋭さを持つてゐるならば、それとは全然別物であるもつと〳〵香ばしい匂ひをば、この書物のうちに嗅ぎ出すであらう。そこには大砲もなければ小銃もないのである。この書物の結果は否定的ではあつても、論理的結論としてその結果を生み出し、決して砲彈のそれのやうには出さなかつたこの手段は、どうしてそんなどころではないのである。人々が道徳といふ名の下に、尊敬されたり甚だしい時には跪拜させられたりしてゐる全てのものに向つての臆病な警戒のために、この書物へ袂別を告げるといふことは、この書物の全體にどんな否定的の言葉も攻撃も惡意も現れてはゐないことを――岩間にその身を乾してゐる海獸のや

うに、圓々と樂しげに日向に横はつてゐることと相矛盾しないものである。つまりはこの海獸こそは私であつたのである。この書物の文章の殆んど全ては、只一人私が海邊と秘密の契りを交したところのジェノアに程近い、あの凸凹とした巖のもとで創案捕捉されたものであつた。時々今でもこの書物に觸れて見ると、どの文章も〳〵、再び深い處から何かしら貴いものを釣り出す釣針となるのである。その全い皮膚は微かな追憶の恐れに打ち慄ふのだ。この書物にあつての特異な技巧は、輕々と音も立てないで急ぎ過ぎ行くもの、私が祟嚴な蜥蜴と名づけてゐる瞬間をば捕へるがためには、決して侮るべき技巧ではない。——それもあの若い希臘の神が哀れな蜥蜴をば只刺き殺すやうな殘酷によつたのではなく、私は一つの尖つたもの、ペンを以て行つたのであつた。「限りなき曙の光あり、未だ輝かず」——この印度の格言がこの書物の扉にある。この書物の作者は一日——あゝ新たなる日の全い連鎖、新たなる日の全い世界！——その初めをなすあの新しい朝、未だに見出すことの出來ないあの柔い紅(くれなゐ)の色をば、どこに求めるであらうか。それは全ての價値の轉換のうちに、全ての道德價値からの脫却のうちに、或は又かつては禁じられ呪はれ蔑まれたものゝ全てに對しての肯定と確信のうちに於てである。この肯定の書物は、その光とその愛とその優しさをば、全ての惡いものに向つて流し出すのである。かうしたものに對して「魂」と良心と生存との強い權利をば取り返すものである。道德といふものは最早攻擊されるべきものではない、只眼中に置かれないだけなのである……。この書物は一つの「然らずんば」によつて結ばれる——これは一つの「然らずんば」によつて結ばれた只一つの書物なのである。

二

人間の一番高い自己反省の刹那をば、前方を望み後方を振り返り、偶然と僧侶との支配から逃れ、さうして「何故(なぜゆへ)なりや」「何處(いづこ)なりや」の問題が初めてその全體的に差し出される偉大な最高潮をば、前以て備へるといふ私の任務——これは人間といふものが自發的に

は正しい道に居ないことや、人間といふものが神のやうなものには全然支配されてゐないといふことや、或は又人間といふものが人間の一番親聖な價値觀念のうちに、否定的な壞滅的な本能である廢頽的本能が誘惑の暴意を逞うしてゐた、といふ識見によつて必然的に出來上つて來るものである。であるから私にとつては、道德價値の起原についての問題が、一番重要なそれなのである。何故かと言ふと、それは人類の將來をば規約するものだからである。全てのものは根本的に一番いゝ支配の下になければならないといふこと、即ち一冊の書物である聖書といふものが、人類の運命に向つての神の支配とその知識とについての究局の安心をば與へ得るものである、といふことをば信ぜよとの要求は、これを現實に引き戻して飜譯するならば、それとは反對な哀れむべき眞實、これまで人類が一番惡いものゝ支配の下にあつたのだといふことや、或は又出來損ひで狡賢くて復讐心の强い人間、即ち所謂「聖徒」であるところの世界破壞者や人類侮辱者によつて支配されてゐたのだ、といふ眞實をば强制しようとする意志を言ふのである。僧侶が（――さうして隱れた僧侶である哲學者をも含んで）嘗に一定の宗教社會でばかりではなくして、何處にも彼處にもその勢力を振つてゐること、亡び行かうとする意志である頽廢道德が、道德それ自身として承認されるといふことを證明する明かな表示は、その到る處利他主義に與へられる無條件の價値と利己主義に與へられる敵意である。かうした點で私と同意しない人間をば、私は一個の感染者と見做すものである……。だが全世界は私と同意しない……。かういふ價値の反駁については、生理學者には少しの疑さへないのである。若しも體內の最小機關が、たとへほんの一寸でもその自己保存とその補力、即ちその「利己主義」をば、完くはつきりと實行することを怠るならば、その全體は衰弱してしまふものである。生理學者はどうしても荒廢した個所を切り除かうとする。荒廢した個所とこの、どんな共存をも否定する。さういふ個所に向つてはどんな同情をも持たないのである。ところが僧侶は全體の、即ち人類の頽廢をば望んで己まないのである。だから頽廢した部分をば保存するのである――この價を支拂つて人類をば支配するのである……。道德の助成觀念である「靈魂」とか「精

靈」とか「自由意志」とか「神」などといふ嘘僞のそれは、人類をば生理的に退歩させるといふ意義がなくして、一體どんな意義があるといふのか。自己保存といふことが、肉體卽ち生活力の增加といふことが嚴密に考へられないならば、萎黃病から理想へ、肉體蔑視から「靈魂救濟」へと導くがためには、デカタンスといふ處方の他に一體何があるだらうか。——重味の衰亡や本能に向つての抵抗、一口で言ふなら「自己棄却」——今までこれを稱して道德とは唱へたのである。第一に私は「黎明」によつて、自己を沒却したところの道德に向つて戰端を開いたのであつた。

喜ばしき知識

「黎明」は深く明かで熱のある肯定の書物である。これと同じことがもう一度、しかも最も高く「喜ばしき知識」に當てはまるのである。深廣な意義と氣品のある心持とが、この書物の殆んど全ての文章のうちに、優しくお互ひに手を取り合つてゐる。私の經驗したところのこの上なく驚異的な一月――この書物の全ては一月の贈物である――に向つて感謝を表はす詩の文句は、どんな深い處から「知識」といふものが喜ばしくなつたか、といふことを遺憾なく示してゐるのである。

焔の槍を以て
私の魂の氷を碎くお前
音立てゝ流れながら魂は今海に向づて
いとも高い望を抱いて急ぐ。
いつも快くいつも健かに

極めて愛すべき拘束のうちを自由に――
さうして魂はお前の不可思議をばたゝへる
いとも美しい一月。

第四巻の終りにツアラツストラの最初の言葉が金剛石のやうに美しく輝いてゐるのを見る人々は、こゝに「いとも高い望」と呼ばれるものをば疑ふことが出來るであらうか。――或は又第三巻の終りに、全ての時代の運命が始めて凝り固められたところの、花崗石(みかげいし)のやうな文章を讀む人々もまたこれを疑ふことが出來るであらうか。――その多くをばシチリアノで作つた王子フオオゲルフライの歌は、喜ばしい知識の概念をば非常にはつきりと卽ちプロヴアンサアルの驚くべき早い文化が、全ての半端な文化とは違つてゐる點であるところの、歌手と騎士と自由精神との合致をばこの上なく明白に想起させるのである。わけてもその最後の詩の「ミストラルへ」は、若し言ひ得るならば、道德を超へて自由に踊

り歩く翻奔な舞踏曲であり、しかも一番全いプロヴアンサアル主義なのである。――

ツアラツストラ如是說

大衆の書物であつてしかも何人のものでもない書物

一

これから私はツアラツストラの歴史を物語らう。この著作の根本觀念である、永遠輪廻の思想、卽ち達することの出來る限りの最高な肯定形式――それは一八八一年八月に考想されたのである。その一頁には「人類と時代との彼方六千尺」と書かれてゐる。その日に私は森を通り拔けてシルヴアプラナの湖に行つたのであつた。スルライには程遠くもない、ピラミツドのやうに高く聳える岩の傍に留つたのである。――この日から二三ケ月以前を振り返つて見ると、私の趣味のうち、わけても音樂的趣味の上に突然はつきりとした變化のあつたことを、その前兆として見出すのである。恐らく「ツアラツストラ」の全ては、それを音樂のうちに數へてもいゝであらう。――耳に聽く藝術にあつての再生こそは、確かに「ツアラツストラ」を生むに先立つべき條件なのであつた。一八八一年の春を送つた、ヴ

イッエンツアに程遠くない山中の一小溫泉場レコアロで、私は同じ「再生者」である師友ペテル・ガアスト Peter Gast と共に、フェニックス的音樂が〔フェニックスはギリシャ神話に出づる不死鳥。再生的音樂の意か——譯者〕決して今までにはなかつたやうに輕妙な輝く翼を廣けて飛んでゐるのを見出したのである。それこは反對に今度は、この日から一八八三年二月に突然思はぬ事情で出來た分娩の日までを逆に數へて見るこ、ちやうど姙娠十八ケ月こいふことになる——その中の二つ三つの文章をば序文に引いた最後の部分は、ちやうどリヒアルト・ワアクナアがヴェネヂツヒで死んだ神聖な時に出來上つたのであつた。滿十八ケ月こいふこの數は、少くこも佛教の下にあつては、私が牝象であるといふ思想を指示するものである。——この時間は類のない或るものの近づいたこを深く示すところの「喜ばしき知識」に向つて供へられた。つまりこの書物は「ツアラツストラ」それ自身の起源をば物語るものなのである。その第四卷の一番終りから二つ目の文章で「ツアラツストラ」の根本思想を示してゐるのである。——「生に献ぐる歌」(合唱こ管絃樂この合成音樂に用ひるもの)も亦此の中間的なものである。その音律表は今から二年前にエイ・ヴェイ・フリツチ E. W. Fritch の手でライプチヒに出たが、これも亦私の悲劇的情熱こ呼んでゐる特に肯定的な情熱が、私の內部に一番高く內在してゐたその年の有樣をば示す上に恐らくは少くない徵候なのである。いつかは私の記念のために、この詩の歌はれる時があるであらう。——誤解の行きわたるこを恐れて明かに注意するが、この本文は私の作つたものではないのである。それはその當時私が親しくしてゐた若いロシア婦人のルウ・フオン・サロメ Lou von Salome の驚くべき靈感からである。何はこまれこの詩の最後の文句の意味がわかる人には、私がどうしてそれを撰びそれを讃美したかといふことを推察することが出來るであらう。これ等の言葉は偉大なものである。苦しみといふものは生命に對しての反對だこは思はれない。「もうお前は、私に與へるべき幸福を殘さないこいふのか。よし、お前はまだお前の苦しみをば抱いてゐる……」恐らくは私の音樂も亦、この箇所で偉大なものである。(最後のAクラリネツトのCは Cis の誤植である)——私はその次の一

冬をば、キヤバアリの町とボルト・フイノの岬との間に入海となつてゐる、ジアノアに程近いあの靜かな絶景のラバロ灣で暮したのであつた。私の健康は非常にいゝとは言へなかつた。その冬は寒くて雨が大變多かつた。荒波が夜の眠りを妨げたくらゐに海と直面してゐた寓居は、どこからどこまでも私の願ひと反對なものを與へたのであつた。にも拘らず、しかも全ての大切な岐れ目は「にも拘らず」出來上るといふ私の信條への證明のやうに、「ツアラツストラ」の完成したのはその冬の、それも惡い車情の下にであつた。——私は午前中松林を通り抜け遠く海を見渡しながら南の方へ、ゾアグリに通じる廣い登り坂の街道をば上つて行つたのである。健康が許しさへする時には、いつも午前中にはサンタ・マルゲリタからボルト・フイノの後までその灣をばぐるツと一廻りするのであつた。この土地とそしてこの風景とは、フリイドリツヒ三世が殊の外愛してゐたといふ譯から、更に親しみ深く思はれた。皇帝がこの些やかな忘れられた幸福の世界をば、その最後に訪ねたといふ一八八六年の秋、偶然私も再びこの海邊に來たのである。——「ツアラツストラ」第一編の全てが、とりわけ體型としてのツアラツストラその人が、私の許へ訪れて來たのは、否正く言へば私に向つて襲つて來たのも、やつぱりこの二つの路に於てであつた。

二

この體型を理解しようとすれば、人は第一にその生理的の前提をばはつきりとしておかなければならない。それは私が偉大な健康と稱するものである。私は「喜ばしき知識」第五卷の終りの章で說べておいたそれ以上に、より人格的に說明することは出來ない。「私たち新しいもの、名もないもの、理解出來ないもの——その文章は語るのである——私たちはまだ證をされない未來の早生兒、新しい目的のためには新しい手段が、新しい健康が曾てあつたあらゆる健康よりももつと强いもつと怜悧な、粘り氣のある大膽な快活な健康を必要とはする。これまでに存在してゐた價値や願望の全てを經驗して、この理想的な「地中海」のあらゆる岸邊を漕ぎ行かうと渴き求める魂を持つた人や、さてはその極みない經驗

によつて理想征服者や發見者や或は又藝術家やに、賢明よりも勇氣に富み、幾度こなく破船の害を蒙りながら、しかも既に話したやうに不相應な程の健康に恐ろしいほどの健康に、また繰り返し〳〵それを新しくするところの、私たち理想を求めるアルゴ船の人々は、――その報獻ででもあるかのやうに、その行く手には誰一人こしてその境を見なかつた未見の國土をば、これまでの國々と理想の隱れ家の彼岸をば、私たちがその所有慾と好奇心とによつて我を忘れるほどに――あゝ、もうどんな聖徒や立法者や聖者や學者や敬虔な人や古風な仙人たちの心持がどんなであつたかといふことを知らうとする人は、そのためには何はこもあれ先づ一つのことを、偉大な健康をば必要とはするのである――かういふことは人々が只それを持つてゐるこいふだけではなく、常にそれを獲得し獲得しなければならない。何故なら人間はいつも繰り返し〳〵、これを犧牲に供し供さなければならないからである。さうしてやがて長い間その路半にあつた後なものにさへ滿足しなくなる程に、奇異なものや不可解なものや、さては神のやうなものに溢れた世界をば持つてゐるかのやうに思はれるであらう。かういふことを眺めた後に、しかもさうした熱い望をその胸に抱きながらも、どうして現在の人間に滿足することが出來るであらうか。それは非常に感心出來ない事柄ではある。だが、私たちが現在の人間の最高價値の目標や希望をば、强ひて眞顏で見たり、やがてはその上注意さへもして見ないこいふことは避けることこの出來ない事實である。もう一つ別な理想が、不思議な蠱惑的な危險至極な理想が、私たちの前にやつて來る。私たちはどんな人に對しても易々こその恩澤に浴する權利をば與へなかつたから、どんな人たちに向つても此理想をば勸說しようこはしなかつたのである。此理想といふのは素朴な、言ひかへるなら自然的に溢れる充實こ力量こによつて、かつては神聖だこか善良だこか不可解だこか神秘だとか言はれてゐた全てのものをば蔑視する精神のそれであつて、この精神にこつては人々が當然その價値標準の根本こしてゐる最高のものでさへも、只危險こか衰退こか墮落とか、又は少くこも休息とか盲目こか一時的自己忘却とかといふ意味だけにしか見られなくなつたのである。時によつては非人間的に見え勝ちな――例へて言ふと

これまでの社會での眞面目さ、卽ち態度とか言葉とか調子とか見方とか德義とか任務などといふやうな全てのこれまでにあつた崇嚴さと相並んで、そこへ突然それの反對物として置かれる場合のやうなものである――だがそれにも拘らず、そこから偉大な眞面目さが作られ、初めて本當の疑問點が注がれ、魂の運命は轉回して、時の指針は動き出し、悲劇の開かれる人間的な――超人間的な幸福と好尙との理想なのである……」

三

この十九世紀末の現在、强大な時代の詩人たちが靈感と名づけてゐたものゝ概念をば、はつきりと抱いてゐる人があるであらうか。若しもないと言ふなら私が說明しよう。――人々がほんの少しでも未だに迷信を持つてゐるとするならば、その人は自身が極めて優れた力の化身であるとか、その代辯者であるとか、さては又その媒介者であるとかといふ觀念をば、到底除く譯には行かないであらう。人間の世界から深くすつかりと穩れ去つてゐるものが突然言ひやうもない程はつきりと鋭く目に見え、耳に聞えるやうになる、といつた意味での天啓的觀念といふものは、只その事實をば記述したのに過ぎないものである。人々はそれを聽くのであつて、それを求めるのではないのである。人々はそれを受けはする。だが誰が與へるのかといふことを問はうとはしない。一つの思想が電光のやうに、その隅々までにも必然性を帶びながら輝いて出るのである。――私は撰擇といふものをば持つてはゐなかつた。その激しい緊張は、時には涙の流れに解けて、心ならずも足の歩みは、その間に進んでは緩み、緩んでは進む大きな歡喜である。その足跡にさへも、限りなく細い戰きとむづ痒さのうちに、尙はつきりと意識を伴うた完い忘却である。そこには極めて惱ましく又極めて暗いものさへもその障壁とはならず、その溢れる光のうちなる缺くことの出來ない色彩として、生れ出づるものとして、さては又要求されたものとして、動く幸福の深淵である。廣い世界を包むリズムを感じる本能である。――廣濶なリズムは十中八九靈感の力と標準され、或は又その壓迫力と緊張力とに向つての調和として心要なものであ

る。その全てはまるで非自由的の意志ででもあるかのやうに、だが又自由の感情と絶對的の狀態とさうして神々しい嵐の中にあるかのやうに生れて來るものである。表象とか例證などの非自由意志的な性質は一番注目に價する事柄である。人間にはどんなものが表象であつて又どんなものが例證であるかといふ概念は何もない。全てのものは一番直接な、一番正當な、さうして一番單純な表現として示されるのである。ツアラツストラの言葉で言ふと、まるで物自體が實際に現れて、しかもその例證の役目をばそれ自身に務めてゐるかのやうに思はれる。――「こゝには全てのものが愛撫しながら君の物語に來て、君に媚びる。何故ならば、それはお前の背に上らうとするがためである。その例證の一つ一つにあつて、お前はその一つ一つの眞理に乘り移つた。そこには全ての存在の言葉とその言葉の箱とが、お前のために躍り出る。全ての存在は言葉とならうとはする。全ての轉生はお前についてその物語る術をば知らうとはする――」これは私の靈感の經驗である。「自分も亦それと同じである」と私に向つて言ふことの出來る人をば見出さうとすれば、私は屹度何

千年かの昔に溯らなければならないに違ひがない。

四

それから二三週間、私はジェノアで病床に臥したのであつた。それに續いてロオマでの鬱陶しい春――それは並大抵ではなかつた。土地として「ツアラツストラ」の作者には一番適しない、しかも自分から進んで選んだのではないこの市は、とりわけ私をば苦しめたのであつた。私はそこを去らうとした――無神論者であつて教會に對する本當の敵で、しかも私とは深い交渉のあるホウヘンストタウフエン家の傑人フリイドリツヒ二世がその記念として、ロオマへの敵意によつて建てられた（いつかは私も一つの都を作るであらうが）ロオマの反對であるアクイラへ行かうと考へたのであつた。だが運命にはどうともすることは出來なかつたのである。再び私は歸らなければならなかつた。幾度か無駄骨を折りながら反基督的の場所をば探し求めては、とどのつまりピアツサ・バルベリニで滿足しなけ

ればならないこととなつた。どうかして出來るだけ不愉快な臭氣から逃れたいと思ふ餘りに、クイリナアレの宮殿へ行つて、哲學者に貸すやうな靜かな部屋はないかと、よくも訊かなかつたと思ふほどである。今云つたピアツサの高臺の、ロオマが一目に見えて遙かの下からは泉の噴き出る音が聞えて來る一部屋で、かつての詩のうちで一番寂寥の歌であるところの「夜の歌」は書かれたのであつた。いつもその頃は何とも言へない憂鬱の旋律が、私を取り卷いてゐた。さうして私はこの旋律の復唱句をば、「不滅の前に死せる……」といふ言葉のうちに認めたのである。夏が來て、私の心に「ツアラツストラ」の電光が初めて輝き渡つた神聖の土地に歸つて後、「ツアラツストラ」の第二編が出來たのであつた。それは十日間で十分であつた。第一編でもまた第二編でも、いつも私にはそれ以上の日數は要らなかつたのである。その冬が來て、私の生活に初めて光を注いだ靜かなニツサの空の下で、第三の「ツアラツストラ」が出來た——さうしてこゝに完成を告げたのである。その全部を通じて殆んど一年にもならなかつた。私にとつては忘れることも出來ないその刹那々々、ニツサの田舍にあつたさまざまな知られてゐない高臺や土地までが神聖なものとはなつた。「新舊の坂道」と名づけられた重要な一章は、停車場から奇體なムウア人の巖居の地エザへまでの、苦しい上り路の間で考想された——創造力が一番充實してゐる時には、私には筋肉が非常に輕快であつた。人は度々私の跳り上つてゐるのを見ることが出來たのである。その頃私は疲勞などは考へたこともなしに、七時間も八時間も山路を歩くことが出來た。私は多く眠り、多く笑つた——何處から何處まで健康で忍耐力があつた。

五

「ツアラツストラ」を書いてゐる間、この十日間の勞作を除いては、とりわけそれから後の四五年間といふもの、この上ない苦しい時であつた。人間は不滅にならうとするがためには高い價を拂ふものである。そのために人間は、生きつゝある間にも度々死ぬる。——私が偉大の怨恨と呼んでゐるものがある。勞作でも又行爲でも、全ての偉大なことが一

度出來上ると、直ぐさまそれを行つたものに對して復讐するのである。それを行つたといふだけで、もうその人は弱つてしまふ。——もうその人はその行つたところのものに耐ゆることが出來ない。面と向ふことは出來なくなる。人々の欲することが出來なかつたものや或は又人類の運命が結びついてゐるものをばその後に從へ——やがてはそれを自身の背に背負ふ！　それはぐた〳〵にその身を打ち碎いてしまふ……偉大の怨恨！——それからもう一つはその人を繞る恐ろしい寂莫である。寂莫には七重の皮膚がある。それを貫くものは誰もない。人間を訪れてはその友に會釋するものがある。だが此新しい寂莫ばかりは、どんな人たちの眼差に向つても何の會釋さへもしないのである。甚しい時には或る反感さへも抱いてゐる。私はさうした反感をば、まことにさまざまな程度で、それも私の近くに居る大抵の人たちから受けた。俄かに離れて行くといふことほど、その人に深い哀しみを與へるものはないやうに思ふ——優れた人で、尊敬こいふものをば除外視して生きて行く術を知らないものはないのである。それから今度は第三に、ほんの小さな刺戟に對しても、

深く感じ易い性質、さまざまの小さなものに對しての自負がない、こも言ふべきものである。これは私にとつて全ての創造的行爲こか、全ての極めて特異な極めて內面的な、極めて深い處から出た行爲の前提としての、さまざまの防禦力の激しい消費によるものゝやうに思はれるのである。謂はばそのために小さなものへの防禦能力は制止されてしまふ。かうした能力にはどんな力も溢れては來なくなる。尙私はもう一つ消化不良になつたり運動が嫌ひになつたり、或は又寒冷の感覺や甚だしい時には錯覺にさへも——その十中八九は只病理學的に缺陷こされてゐるこころの錯覺にさへも——大變襲はれ易いこいふこを告白しておかう。例へばかういふ狀態の時に、暖く人間に親しみたいやうな氣持が甦つて來ることなどがあると、私は有りもしないのに一匹の牛が近づいて來るのを感じるのであつた。牛が近づいて來るといふことには暖さがあるからそんな錯覺が起つて來るのである。

六

この書物は、どこからどこまでも特異の地歩を占めてゐるものである。所謂詩人連中をばそこに竝べて見るがいゝ。これに對等するやうな充實した力で作られたものは、恐らくは一つだつてあるまい。私の「デイオニソス的」の觀念は、こゝに於て最上の行爲となつて現れたのである。これを主として考へて見ると、他の人たちの全ての行爲は、力なく而も限定的なものに過ぎなく思はれる。例へばゲエテもシエイクスピアも、ほんの一瞬間でさへこの恐ろしい情熱や超越的な境地で呼吸することを知らなかつたであらうといふことや、或はツアラツストラの側へダンテを持つて來れば、只一個の信者のほかの何者でもなく、眞理を創造する人間、一つの世界を支配する精神、卽ち一つの運命ではないといふことや――さては又吠陀の作者が一個の祭司に過ぎない者であつて、ツアラツストラのやうな人間の靴紐を解くにさへ價しないといふことなどは、どれも皆語るに足りない事柄で、そ

れに對して距離の念を、この作品の持つ超越的な寂莫の念をば與へるには足りない事柄である。永遠にツアラツストラはかう物語る權利を持つてゐるのである。「私はその周圍に境界を、神聖な境界を廻らした。山が高ければ高く、私と共に登るものも亦少い――私は極めて神聖な山から一つの連山を形くる」全ての偉大な精神とか善とかいふものを一つに集めて見るがよい。そのすつかりを集めたところで、ツアラツストラの物語つたものゝ一つさへ物語れないであらう。彼が昇りつ降りつするところの梯は、まことに恐るべきそれである。彼はどんな人たちよりも、更に見聞し更に欲望し、しかも又更に實行したのである。あらゆる精神の中でも肯定的なものは、その語るところの一つ一つに矛盾がある。ツアラツストラにあつては全ての矛盾は結合せられて、こゝに一つの新しい統一となる。人生にあつての一番高い力と一番低い力と一番重いものと一番輕いものとさうして一番恐ろしいものとが、一つの根原から永遠の確實を以て流れ出る。人々は今に至るまで、どんなものをば高いと言つて、どんなものをば深いといふのかを知らなかつた。更に又どんなものをば

眞理といふのかを知らなかつた。此眞理の啓示には、それがかつて所屬した所の、偉大な人々の一人にさへも、想起された事柄は一つもない。ツアラツストラの前には、どんな知識もなければどんな魂への探求もなく、更に又どんな述說の術をも持たないのである。最も普通な言葉や最も平凡な言葉が、そこではかつて耳にしたことさへないやうなものをば物語る。言葉は情熱に打ち慄ひ、巧みな辯說は音樂となり、光はかつて想ひもよらなかつた未來に向つて投げられる。これまでに存在してゐたやうな力强い例證を作る力も、この自然的な創造力として再生した言葉といふものに比べて見ると、弱々しくてその上遊戯的である。——ではツアラツストラがたくさんの人たちに混つて、一番懇ろな言葉をばどんな風に交へたか。或は又彼がそのの敵であるところの僧侶たちの手を優しく握り、彼等のために彼等と一緒にどんな風に苦しんだか。——こゝではどんな瞬間にも人間といふものは征服せられて、「超人」といふ概念は一番高い實在となつたのである。——かつての人間にあつて偉大だと言はれた全てのものは、彼からはずつとの遠い下方にある。冬至の空にも似た靜けさや、快活や、惡意と善意との合致や、或はそのほかのツアラツストラの型體をば示す全てのものは、それが偉大といふものの本質を形づくるものだとは今が今まで夢にも考へられなかつたところである。實にかうした空間にあつて、又實にかうした反對のものに接しながら、ツアラツストラは彼自身が、全ての存在物中の最高種屬であることを感じたのであつた。しかも彼がこの最高な性質をばどんなに定義してゐるかといふことを聽くならば、もうその上彼の提示を求めようとはしないであらう。

——一番長い梯を持つて、一番深いところに行くことの出來る魂
遙かに走り遙かに迷ひ遙かに流浪するいと廣い魂
喜び願ひつゝ偶然のうちに飛び入る必然この上ない魂
轉生に入つて存在する魂、意欲と渴望とを欲して所有する魂——
いと廣い圈內で、自らを追ひ自らを逃れる魂